



Title	機能文法から見た日本語のモダリティ副詞
Author(s)	Dhippayom, Kiattikoon
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/52400
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

博 士 論 文

題目 機能文法から見た日本語のモダリティ副詞

提出年月 2006 年 6 月

言語社会研究科 言語社会専攻

氏名 DHIPPAYOM Kiattikoon

要旨

本論文では、Simon C. Dik の Functional Grammar (略 FG) の理論を発展させた枠組によって、日本語副詞を対象とし、「モダリティ・主観評価」を表す副詞について研究を行った。本研究では、まず「非名詞成分の修飾語」として「副詞」を対象として扱い、検索エンジン「Google」でデータを収集して、例文に現れる対象の副詞を分析した。研究対象の副詞は、『現代副詞用法辞典』（飛田良文・浅田秀子 2003）から収集した。

本研究では、「モダリティ」は「証拠的モダリティ」「認識的モダリティ」「義務的モダリティ」三つのカテゴリーに分類される。証拠的モダリティは、「経験」「推測」「伝聞」「主観」などである。認識的モダリティは、「確実」「可能」「見込み」「不可能」などである。義務的モダリティは、「強制」「適切」「許可」「不適切」「禁止」などである。また、モダリティを表すためには、各言語には、「文法的方法（文型や法動詞など）」と「語彙的方法（副詞や前置詞句など）」の両方の方法がある。例として英語の場合は、副詞だけでモダリティを表すことが充分であるが、英語のモダリティ副詞の大部分が形容詞から派生したものである。しかし日本語の場合は、英語とは対照的に、副詞が文型と合わせてモダリティを表すように用いられるものである。そして、モダリティを表す日本語副詞の意味は、英語と同じように絶対的なものというよりも、文型との共起制限によって解釈されるものであり、相対的なものと言える。例えば、副詞「必ず」は、認識的モダリティ「確実」か、義務的モダリティ「強制」など、いずれのモダリティを表すために用いられるかによって、文型（断定型・命令型）や述語（動作・状態）が異なる。それ故、モダリティを表す日本語副詞を研究するにあたっては、単語として副詞よりも、まずコミュニケーション状況における副詞の役割を検討することが重要となる。

これは以下のような傾向による。すなわち、英語では、コミュニケーション状況によって文の発話内効力を推量させる場合が多いが、日本語では、英語とは対照的に、発話内効力が文末ではっきりと表されるので、コミュニケーション状況によって文の発話内効力を推量させる場合が英語より少ない。モダリティ・評価を表す日本語副詞は、文型に支配され、副次的な役割を担うものにすぎないとは言える。しかし実際は、副詞は名詞・動詞・形容詞と同じように語彙的な意味を含んでいるため、モダリティを表す役割もあると、本論文は主張する。

仁田 (1991) および森本 (1997) の研究は、副詞が日本語の文型と「呼応」するもの、すなわちモダリティ・評価を表す日本語副詞が文型に支配され、副次的役割を担うものにすぎないだという立場から捉えている。しかし、外国人日本語学習者向けの文法説明のために理論枠組を発展させる際には、枠組の普遍性、すなわちある言語の文法に引きつけて考えないこと、に留意しなければならないのである。それゆえ、FGに基づいて新しい理論枠組を発展させ、その枠組でモダリティ・評価を表す日本語副詞の再検討を行うことにする。FGは「機能的パラダイム (Functional Paradigm)」、すなわち「現実状況における言語の使い方の観点」から文法規則を説明する理論枠組である。このような観点を援用することによって、各言語の文構造や語の形成の相違を問わず、諸言語の文法及び言語の使い方を説明することができると、筆者は考える。

次に、どのように「副詞」と「連語」を区分することができるのかということが、問題としてあげられる。日本語副詞の中には、二つの単語から作り出したものがあり、語形的基準だけで「副詞」と「連語」を区分することが難しい場合がある。この問題を解決するためには、機能的基準を語形的基準と合わせて設定し、「副詞」と「連語」を区分しなければならない。機能的基準によれば、モダリティを表す副詞というものは非名詞主要語の修飾語としてモダリティを表すように用いられる語彙項目のことである。従って、ある語が副詞かどうか判断することにあたっては、語形的基準と機能的基準両方の基準を合わせて判断することが求められる。すなわち「副詞」と「連語」を区別するものは、語形でなくて文における機能であることを本論文は主張する。例えば、「おりあしく」は二つの単語から作り出された形式なので、語形的基準だけで「副詞」と「連語」を区別することが難しいが、機能的基準と合わせて分析すれば、「おりあしく」が話し手の気持ちを暗示するために用いられる形式なので、主観評価を表す副詞だと判断することができる。このように、研究範囲内のモダリティ・主観評価の意味を基準として「この語は研究範囲内のモダリティ・主観評価の意味を表すものかどうか」ということをテストし、対象の語が「副詞」か「連語」かのどちらかを決定する方法を、本論文は採用する。

こうしたモダリティ・主観を表す副詞の機能は、モダリティを表す構造や法動詞など「文法的方法」の補完と規定することができる。副詞でモダリティを表すことは、「このモダリティが文法体系の一部であり基本情報だ」よりも、「このモダリティが追加情報になる」と暗示する。つまり、モダリティ・主観を表す副詞の機能は、モダリティ自身だけでなく、モダリティの主観態度・情報源・判断理由も暗示するように用いられるのである。その中

でも、主観評価を表す副詞の機能は、主文で表した命題に対する、話し手の個人的な「よしあし」の判断を表すものである。主観評価を表す日本語副詞は、英語とは異なり、日本語には英語と同じような派生副詞ではなく、より基本的な副詞によって主観評価を表すことができる。これは日本語の特徴の一つといえる。

本研究の実践研究結果は、次のようにまとめられる。対象とした日本語副詞は「あいにく、あたら、いきおい、えてして、おそらく、おもいなしか、おりあしく、おりよく、かならず、かならずしも、かならずや、きっと、さいわい、さぞ・さぞかし・さぞや、さては、しんじつ、しょせん、せっかく、せひとも、たぶん、とうぜん、どうしても、どうでも、どうも、どうやら、ねがわくば、まさか、まさしく、むろん、もちろん、もとより、われながら」全部で32語である。

これらの副詞は、例文に現れるコミュニケーション状況上の意味、および文型との共起制限によって、次のように4グループに分類された。証拠的モダリティを表す日本語副詞は、「どうも」等4語である。認識的モダリティを表す日本語副詞は、「いきおい」等12語である。義務的モダリティを表す日本語副詞は、「かならず」等3語である。最後に、主観評価を表す日本語副詞は、「あいにく」等4語である。

以上、モダリティ副詞・主観評価を表す副詞について概括した。モダリティを表す日本語副詞では、一番多いのが認識的モダリティの表すものだが、その中でも、認識的モダリティを表すものの中で一番多いのは、「確実」である。この現象は次のように説明できる。

「確実」という認識的モダリティは、「物事がそうなることは確かだ」という情報を表すものである。しかし認識的モダリティが、さまざまな主観態度・情報源に基づいて「確かだ」の判断を表すためには、「副詞」を使うことが適切な方法なのである。このことは、「確実」を表す日本語副詞は全てが「確かだ」という判断を表すが、語彙的な意味には相違があることから、適切と言える。次に、義務的モダリティ日本語副詞は、副詞で表すことができる義務的モダリティが「強制」であるが、「強制」と判断することは「これが規則だ」「する必要がある」「しなければ困る」等様々な理由から判断するのである。その理由を暗示するために、「副詞」を使ったほうが適切な方法である。最後に、証拠的モダリティを表す副詞は、推量の根拠・態度の暗示または「主観」の強調を表すために、文型とあわせて用いられることが多い。以上のように、モダリティを表す日本語副詞は、完全にモダリティを表す役割を担うよりも、文型と呼応するように用いられるものであることが明らかとなった。

以上のような本研究の成果は、日本語学習者だけでなく言語学者にとっても困難な、「この副詞は何の意味を表すのか」「この副詞は何と訳すのか」「この副詞とその副詞の相違点はどこか」といった諸問題の解決の一助となる。FGを基にして発展させた理論枠組によって、日本語副詞の機能を理解した上で、本論文は日本語副詞と英語など外国語副詞との機能的な相違を明らかにしたたけでない。同時に、外国人日本語学習者向けの文法説明にも、本論文の成果は援用可能である。

Abstract

The objective of this study is to analyze Japanese modal/evaluational adverbs by using the newly developed framework based on the theory of Functional Grammar (henceforth FG) (Dik 1997). In this study, the functional definition of adverbs as modifiers of non-nominal head was considered first. Then the analysis of Japanese modal adverbs found in collected data was done. Japanese modal adverbs in this study were selected from *Gendai Fukushi Yoho Jiten* compiled by Yoshifumi Hida and Hideko Asada (2003), and the collection of examples of using Japanese modal adverbs was done by using search engine web (Google).

By the newly developed framework, what is called 'Modalities' could be divided into three categories: evidential modalities, epistemic modalities and deontic modalities. Evidential modalities could be classified into four: Experiential, Inferential, Hearsay and Subjective. Epistemic modalities could be classified into four: Certain, Possible, Probable and Impossible. Deontic modalities could be classified into five: Obligatory, Appropriate, Permissible, Inappropriate and Forbidden. Across languages, modalities can be expressed by grammatical means (clause structures or modal verbs) as well as by lexical means (adverbs or phrases). However, in contrast to English, in which most of adverbs are they are derived from adjective so that they have their full semantics in their own so that they can be used as a sole element to express modalities, since modalities in Japanese could be mainly expressed clause structures, Japanese modal adverbs have their use as a complementary element, helping to emphasize modalities which are mainly expressed by clause structures, rather than as a sole element with a full semantics as in English. The semantics of Japanese modal adverbs could be interpreted in terms of their collocation with clause structures in which they are used. For example, the adverb *kanarazu* could be interpreted as either the expression of epistemic modality 'Certain' or that of deontic modality 'Obligatory', depending on which kind of clause structure in which it is used: affirmative sentence with non-action verb or imperative (command or request) sentence. Thus, the study of Japanese modal adverbs should be done by considering their role in a particular verbal

communication situation first rather than by considering them in isolation, to say, they should be considered how they can be interpreted when they are used in particular verbal expression rather than what semantics they contain by their own.

The next problem in the study of Japanese modal adverbs is how to distinguish adverbs from compound words (*Rengo*). Since there are many adverbs in Japanese which are built by combining two single words together, the distinction between adverbs and compound words can not be drawn by using only formal criterion. This is the reason why functional criterion has been introduced in this study. By functional criterion, Japanese modal adverbs in this study are lexical items which can be used to express modalities as non-nominal head (clause) modifiers. To consider that a particular word is an adverb or not, both formal and functional criteria were always used together in this study.

The result of this study can be summarized as follows. There are 32 Japanese modal/evaluational adverbs found in this study: *ainiku, atara, ikioi, eteshite, osoraku, omoinashika, oriashiku, oriyoku, kanarazu, kanarazushimo, kanarazuya, kitto, saiwai, sazo* (also *sazokashi* and *sazoya*), *sateha, shinjitsu, shozen, sekkaku, sehitomo, tabun, touzen, doushitemo, doudemo, doumo, douyara, negawakuba, masaka, masashiku, muron, mochiron, motoyori* and *warenagara*. These modal adverbs can be classified as follows. There are 4 evidential modal adverbs: *doumo, douyara omoinashika* and *warenagara*, 12 epistemic modal adverbs: *ikioi, eteshite, osoraku, kanarazu, kanarazushimo, kanarazuya, kitto, sazo* (also *sazokashi* and *sazoya*), *sateha, shinjitsu, tabun* and *masashiku*, 3 deontic modal adverbs: *kanarazu, doushitemo* and *doudemo*. As for Japanese evaluational adverbs, the following 14 adverbs are found: *ainiku, atara, oriashiku, oriyoku, saiwai, shozen, sekkaku, sehitomo, touzen, negawakuba, masaka, masashiku, muron, mochiron* and *motoyori*. Note that *kanarazu* can be used to express either epistemic modality or deontic modality, so that it has been classified in both group. The largest group of modal adverbs is epistemic modal adverbs, especially 8 adverbs which can be used to express the epistemic modality 'Certain': *ikioi, kanarazu, kanarazuya, kitto, sazo* (also *sazokashi* and *sazoya*), *sateha, shinjitsu* and *masashiku*. The use of different adverbs to express 'Certain' can be explained as the lexical means

to imply the different sources of information or speaker's attitude behind the evaluation of the likeliness (certainty) of the occurrence of an event referred to by the clause. As for deontic modal adverbs, all three Japanese modal adverbs found in this study can be used to express the deontic modality 'Obligatory'. The use of these three adverbs to express 'Obligatory' can be explained as the lexical means to imply different reasons by which speakers consider that an action is obligatory (for example, it is obligatory because it is a regulation or because if you do not do it you will be in trouble). Inferential modal adverbs *doumo* and *douyara* are usually used in combination with *-darou* structure to imply that the speaker's inference is done on the basis of objective evidence, and *omoinashika* and *warenagara* to imply that the proposition expressed by the clause is based on the speaker's personal opinion. It can be concluded that modal adverbs in Japanese have the role as complementary elements to specify modalities in combination with clause structures.

The result of this study could provide better understanding of various problems such as 'what meaning this Japanese adverb contain?' 'how this Japanese adverb can be translated' 'what is the different between these two adverbs'. By the new framework based on the theory of FG, not only the better understanding of Japanese modal/evaluational adverbs but also the application to the new approach of the explanation of their use could be provided.

目次

第1章 序論

1.0	はじめに	1
1.1	問題点および本稿の目的・射程	2
1.2	国語学における先行研究	5
1.3	データの収集	12
1.4	章の構成	13

第2章 理論枠組

2.0	はじめに	15
2.1	標準 Functional Grammar の概説	
2.1.1	FG とは何か	15
2.1.2	標準 FG の枠組	18
2.1.3	「成分順序原則」について	28
2.1.4	標準 FG の観点から見るモダリティ	35
2.2	「モダリティ」「副詞」に関する FG 派研究者の先行研究	
2.2.1	Jan Nuyts (1993)	36
2.2.2	Hengeveld (1992a; 1992b; 1997)	41
2.3	本研究のために発展させた理論枠組	
2.3.1	「副詞」の定義について	48
2.3.2	「モダリティ」と「主観評価」の分類	50
2.3.3	「モダリティ・主観評価を表す副詞」と「成分順序」	53

第3章 モダリティ・主観評価を表す日本語副詞の実践研究

3.0	はじめに	64
3.1	実践研究の準備	
3.1.1	「副詞」の機能的な定義	64
3.1.2	「モダリティ・主観評価」の分類	66

3.1.3	日本語副詞と成分順序	68
3.1.4	日本語副詞のモダリティ解釈メカニズム	71
3.2	実践研究の過程	
3.2.1	研究対象の選択	74
3.2.2	データの収集	76
3.2.3	対象の副詞の分析	77
3.3	モダリティ・主観評価を表す日本語副詞の分析結果	77

第4章 結論

4.0	はじめに	102
4.1	研究結果のまとめ	102
4.2	モダリティ・主観評価を表す日本語副詞についての議論	
4.2.1	諸言語におけるモダリティの表し方について	106
4.2.2	日本語副詞で認識的モダリティの表し方	108
4.2.3	日本語副詞で義務的モダリティの表し方	110
4.2.4	日本語副詞で証拠的モダリティ・主観評価の表し方	112
4.3	外国人学習者に対するモダリティ・主観評価を表す日本語副詞の教育	113

参考文献

第1章

序論

1.0 はじめに

コミュニケーションでは、人や物事を示す「名詞」動作・過程を示す「動詞」物事の状態・性質を示す「形容詞」だけでなく物事の程度・様態・時・頻度など様々な付加情報を示す「副詞」も大切な役割を果たしている。しかし、「副詞」という用語が程度・様態・時・頻度など様々な付加情報を表す語を含めるように用いられるものなので、「ゴミ箱の 카테고리」として認識されていたものである。実際は、伝統的文法では、「副詞 (Adverb)」は、「語形変化のない語」という語形的な定義付けがされているが、そのようにカテゴリーを分類することが副詞の「コミュニケーション上の機能」を理解することを妨げている。さらに、西洋人の言語学者の中には、「(西洋語の) 副詞のほとんどが形容詞から派生したものだ」という事実から、副詞のカテゴリーが存在しないと考える研究者もいる。

ただし、副詞が様々な付加情報を表す語としてコミュニケーションにおける大切さを認めて、副詞のカテゴリーの存在を認める研究者も多い。副詞のカテゴリーには程度・様態・時・頻度だけでなくモダリティや主観態度を表すものも含んでいることから、副詞の機能・用法を研究する価値があることを認める研究者もいる。

本稿では、Simon C. Dik の Functional Grammar の理論を発展させた枠組で日本語副詞を対象にして「モダリティ・主観評価」を表す副詞を研究することにする。「モダリティ・主観評価」を表す副詞の研究を通じて、「モダリティ・主観評価」の研究を深める機会とすることができると思った。Functional Grammar (FG) というのは、「機能的パラダイム (Functional Paradigm)」の基で発展させられた理論枠組である。機能的パラダイムでは、言語の理論は「現実状況で言語の使い方」の観点から文法規則を説明するように発展させるべきものである。そして、Functional Grammar では、「文構造」が「意味」に支配されて、「意味」が「語用」に支配されるということである。このような観点では、各言語の文構造や語の形成も問わず諸言語の文法及び言語の使い方を説明することができる。

(2.1.1. 「妥当性の水準」を参照のこと)

FGの良い点は、Chomsky 変形文法など文で表した「論理的関係」だけに注目する理論枠組に比べて、話し手の主観及びコミュニケーション上の機能に注目して「コミュニケーションの道具」として言語を分析することである。「言語がただ論理的関係の曖昧な表現ではない。違う意義を伝えたいことは、別の構造を使い分けることに導くものである」という考えを維持することがFGの特徴の一つである。

例えば、変形文法には「PANCAKE John doesn' t like」が「John doesn' t like pancake」の客語「pancake」を文頭に置くから作り出したものだという説明がある。いいかえれば、「PANCAKE John doesn' t like」と「John doesn' t like pancake」の違うところが「pancake」の位置だけである。このような考え方は、「PANCAKE John doesn' t like」と「John doesn' t like pancake」が同じ意味、すなわち同じ論理的関係（ジョンはパンケーキが好きじゃない）を表すということだけに注目することから生じたものである。しかし、FGでは、客語の「pancake」を文頭に置くことが話し手が「ジョンの嫌いなものはパンケーキだ」という意味を強調して伝えるように作り出された表現である。「PANCAKE John doesn' t like」と「John doesn' t like pancake」の違った成分順序は、実際は違った意義を表す、という説明がある。

1.1 問題点および本稿の目的・射程

外国人日本語学習者の中では、日本語副詞、特にモダリティを表す副詞の習得が大変難しい。「この副詞は何の意味を表すのですか」「この副詞は何と訳すのですか」「この副詞とその副詞の違うところはどこですか」という色々な問題は、日本語学習者だけでなく言語学者にとっても説明しにくい問題である。ただし、上記の問題を説明するためには、日本語副詞の役目を理解した上で、日本語副詞と英語など外国語副詞との機能的な相違を明らかにする必要がある。

日本語副詞と外国語副詞の相違を説明するにあたっては、普遍性が高くて日本語副詞の

特徴も十分に説明できる両方の性質を持っている理論枠組を発展させることが必要である。そして、著者は本研究の為にオランダ人言語学者の Simon C. Dik が発展させた Functional Grammar (略 FG) に基づいて独特の理論枠組を発展させた。Simon C. Dik の FG を採用する理由は、「モダリティ・主観評価」と「副詞」の研究を行う為には、「言葉の組立としての言語」より「コミュニケーションの道具としての言語」という立場で言語を取扱う理論枠組が必要であると考えられる。それゆえ、本研究では言語表現・成分の「コミュニケーション上の機能」の視点から文法を説明する Simon C. Dik の FG を採用した。Simon C. Dik の FG の特徴は、次のようにまとめられる。

- 1) FG では、文を「核叙述」「心叙述」「拡大叙述」「命題」「文」という5つの階層に区分する。「叙述」「命題」「文」はそれぞれ「事象」「命題」「発話内効力」を示す。
- 2) FG では、「文法的方法 (Grammatical means)」と「語彙的方法 (Lexical means)」をはっきりと区別して、「活用形・法動詞」と「副詞・前置詞句」という文における情報を表す方法を簡単に分類する。それは、「演算子 (Operators)」と「周辺項 (Satellites)」の使い分けである。「演算子 (Operators)」と「周辺項 (Satellites)」は、それぞれ「文法的方法 (活動形など)」と「語彙的方法 (副詞など)」を表す成分・活動形を示すように用いられるものである。
- 3) Simon C. Dik の FG (すなわち、標準 FG) では、基本述語が「名詞的」「動詞的」「形容詞的」という3つの「基本述語」に分けられて、基本述語から派生述語に変形させる述語形成規則が説明される。

(詳細は、第2章『理論枠組』を参照のこと)

ただし、日本語を分析するためには、標準 FG の枠組を改良することが必要である。例えば、西洋語、特に英語では、日常生活で使われる副詞のほとんどが形容詞から派生したもの(例 fortunate → fortunately) ということによって、標準 FG では「名詞的」「動詞的」「形

容詞的」三つの基本述語にしか分類されない。言い換えれば、副詞のカテゴリーを認められていない。しかし、最近ではFG派研究者の中にも様々な理由で「基本述語に副詞を加えるべきだ」という意見を持つ研究者もいる。そして、FGの枠組を改良することにおける最初のタスクとして考えられるのは、基本述語のセットに「副詞」を加えて定義を与えることである。上記のことから、本研究の対象はモダリティと（話し手の）主観評価を表す日本語副詞とする。以上のことを踏まえると、本研究のタスクが次のようにまとめられる、

- 1) 「副詞」に（機能的な）定義を与えた上で、日本語副詞の特徴・分類を研究する
- 2) 「モダリティ」と「主観評価」の定義・意味範囲・分類を検討する
- 3) 「モダリティ」と「主観評価」を表す日本語副詞の実践研究を行う

文法上の機能の観点から見ると、副詞は動詞や形容詞、文全体などを修飾するように用いられる語といえる。副詞は述語として使われた場合があっても、副詞の主要な機能が「修飾語」、つまり「非名詞成分の修飾語」なのである。本稿では、日本語副詞の実践研究の対象は動詞や形容詞、文など非名詞成分の修飾語として使われた副詞の例に限られる。そして、名詞修飾語や述語として使われた副詞の例が研究範囲外である。さらに、副詞は程度・様態・時・頻度・モダリティ・主観評価など表した付加情報によって様々な下位種類に分けられるのだから、本研究の対象がモダリティ・主観評価を表す日本語副詞に限られる。

次の問題は、「モダリティ」というものが何、つまり、モダリティの定義がどのように与えられるのか？この問題は、言語学者の中でも難しい問題であり、「モダリティ」の定義も様々な見解が存在するのである。本稿では、モダリティの定義・分類を研究するために、「モダリティ」および「モダリティを表す副詞」に関する Simon C. Dik や他人の FG 派研究者の考えを基にして独特の理論枠組を発展させてモダリティ定義・分類を新たに設定することにする。

1.2 国語学における先行研究

モダリティ・主観評価を表す日本語副詞を研究する際には、まず、日本人研究者の観点から見る「副詞」や「モダリティ」の概念を理解することが必要である。益岡隆志・田窪行則（1995）によれば、「副詞」というものが「様態の副詞」「程度の副詞」「量の副詞」「テンス・アスペクトの副詞」など述語の修飾語として使われる副詞と「陳述の副詞」「評価の副詞」「発言の副詞」など文の修飾語として使われる「文修飾副詞」という二種類に分けられる。述語の修飾語として使われる副詞は、次のように分類される、

「様態の副詞」とは、動きのありさまを表す副詞のことである。例えば、「堂々と、黙々と、一気に、いやいや、ぐつすり、ゆっくり、ぼんやり、はっきり（と）、ザーザー（と）」などである。

「程度の副詞」とは、程度のありかたを表す副詞のことである。例えば、「大変、はなはだ、ごく、極めて、ずいぶん、相当、かなり、けっこう、なかなか、少し、ずっと」などである。

「量の副詞」とは、動きに関係するものや人の量を表す副詞のことである。例えば、「たくさん、いっぱい、たっぷり、どっさり」などである。

「テンス・アスペクトの副詞」とは、事態が起こる時間や事態の発生・展開のありかたを表す副詞のことである。例えば、「かつて、のちほど、すでに、もう、まだ、だんだん、まもなく、あらかじめ、まえもって、まず、ふたたび、また」などである。

一方、文修飾副詞は、次のように分類される、

「陳述の副詞」とは、文末の「ムード」の表現と呼応する副詞のことである。例えば、「ぜひ」は、文末の依頼の表現（「～てください」の文形）と呼応するように使われることがある。陳述の副詞は、次のように分類される、

疑問と呼応するもの：「いったい、はたして」

否定と呼応するもの：「決して、必ずしも、とうてい」

依頼・命令、願望と呼応するもの：「ぜひ、なんとか、どうか、どうぞ」

概言・確言と呼応するもの：「おそらく、たぶん、きっと、必ず、絶対、確か」

伝聞と呼応するもの：「なんでも」

比況と呼応するもの：「まるで、あたかも、さも」

感動と呼応するもの：「なんと、なんて」

なお、「もし、万一、かりに、たとえ、いかに」など従属節において条件・譲歩の表現と呼応するものも陳述の副詞に含める。

「評価の副詞」とは、当該の事柄に対する評価を表す副詞のことである。例えば、「あいにく、さいわい、当然、もちろん、偶然、たまたま」などである。

「発言の副詞」とは、当該の発言をどのような態度で行う副詞のことである。例えば、「実は、言わば、例えば、要は、概して、総じて」などである。

なお、副詞の中には、上記の分類に収まらないもの「その他の副詞」もある。例えば、「特に、単に、異に、やはり、せつかく、せめて、さすが」などである。

では、「陳述の副詞」と「評価の副詞」を検討しよう。「評価の副詞」の方は、定義・意味範囲が明らかで分かりやすい。しかし、「陳述の副詞」の方は、定義・意味範囲が幅広い。述べたとおりに、陳述の副詞は文末の「ムード」の表現と呼応する副詞であるが、問題は「ムード」の意味範囲である。陳述の副詞の下位分類から見ると、国語学における「ムード」の意味範囲が「疑問・依頼・命令」という発話内効力から「概言・確言」という認識的モダリティまで幅広いものである。さらに、「ムード (mood)」とか「モダリティ (modality)」とか二つの用語が使いかえることができるし、意味範囲も研究者によって異なる。だから、モダリティを表す日本語副詞の研究を進める前には、国語学における「モダリティ」の概念を理解することが必要である。

仁田義雄 (1991) では、「モダリティ」とは、現実との関わりにおける、発話時の話し手の立場からした、言表事態に対する把握のし方、および、それらについての話し手の発話・伝達の態度のあり方の表し分けに関わる文法的表現である。モダリティは、大きく「言表事態めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」との二種類に分かれる。

言表事態めあてのモダリティは、大きく情意系の「待ち望み (意志・希望・願望)」と認識系の「判断 (押し量りや推論を表すものなど)」二種類に分かれる。

発話・伝達のモダリティは、下位タイプが次のように分けられる。

- ① 動きかけ 命令 (こちらへ来い)
 誘いかけ (一緒にたべましょう)

- ② 表出 意志・希望 (今年こそがんばろう／水が飲みたい)
 願望 (明日天気になあれ)

- ③ 述べ立て 現象描写文 (子供が運動場で遊んでいる)
 判断文 (彼が評議員に選ばれた)

- ④ 問いかけ 判断の問いかけ (彼が大学生ですか)
情意・意向の問いかけ (水が飲みたいの／こちらから電話しましょうか)

上記の「モダリティ」の定義から見ると、国語学における「モダリティ」というものは主に文法的な方法(文型・文構造)で表されるものである。国語学の立場から見ると、副詞、つまり、陳述の副詞がモダリティを表す文型(文末)と「呼応」するものにすぎない。言い換えれば、陳述の副詞の使い方は文型(文末)に支配されるのである。これが日本語の特徴の一つと言える。英語では、副詞が完全にモダリティを表す役割を担う場合が多い。例えば、

- (1) a. Undoubtedly, political and economic factors have played their parts. (主観)
b. Allegedly, John was guilty of perjury. (伝聞)

(1)では、「主観」と「伝聞」のモダリティを表すために、「Undoubtedly」と「Allegedly」という副詞を添えるだけでよい。

なお、言語学の観点から見ると、「発話・伝達のモダリティ」というものが「発話内効力」すなわち、文型で表す発話内効力というものに相当する。言語学にとっては、「発話内効力」と「モダリティ」が別のものである。そして、言語学においていわゆる「モダリティ」が「言表事態めあてのモダリティ」に相当する。

森本順子(1997)には、話し手が自分の言うことに対する主観的／心理的態度を表現する「SSA 副詞(SSA-speaker's subjective attitude)」の研究がある。分析の対象は、下記の29の副詞である、

たぶん、きっと、おそらく、かならず、まさか、ぜったい、さぞ、たしかに、ひょっとしたら、たしか、さいわい、あきらかに、あいにく、どうせ、どうも、しょせん、どうやら、けっきょく、どうか、やはり、どうぞ、じつは、ぜひ、事実、もちろん、とうぜん、しょうじき、寛容にも、賢明にも

上記の分析対象から見ると、「SSA 副詞」というものが認識的モダリティを表すもの（「たぶん」「たしかに」等）も主観評価を表すもの（「さいわい」「あいにく」等）も含まれている。

森本（1997）では、共起関係テストによって SSA 副詞の下位グルーピングが次のように行われた。

【グループ A [+平叙文]】

グループ AI [-過去平叙文]

- | | | |
|-----|--------|-------------------------------|
| A11 | [+だろう] | たぶん、おそらく、きっと、かならず、ぜったい、まさか、さぞ |
| A12 | [+だろう] | しょせん、どうせ |
| A13 | [-だろう] | どうも、どうやら |

グループ A2 [+過去平叙文]

- | | | |
|-----|--------|----------------------------|
| A21 | [+だろう] | けっきょく、やっぱり、とうぜん |
| A22 | [-だろう] | あいにく、さいわい、賢明にも |
| A23 | [-だろう] | あきらかに、たしかに、たしか、もちろん、事実、じつは |
| A24 | [-だろう] | しょうじき |

【グループ B [-平叙文]】

- | | | |
|---------|--------|---------|
| グループ B1 | [-意向文] | どうか、どうぞ |
| グループ B2 | [+意向文] | ぜひ |

上記の下位グルーピングから見ると、SSA 副詞のほとんどが平叙文に現れるものである。しかし、平叙文に現れないで疑問文・命令文に現れるものもある。さらに、否定テストの結果によれば、SSA 副詞のほとんどはそれ自身が否定されないものである。例えば（森本（1997: 39））、

- (2) a. 太郎は行った。
b. 太郎はあいにく行った。
c. 太郎はあいにく行かなかった。

(2b)と(2c)は、それぞれ「太郎が行ったことを残念に思う」と「太郎が行かなかったことを残念に思う」と解釈することができる。この2つの例文で「残念に思う」という主観的態度を表すのが「あいにく」のである。「あいにく」は、(2b)でも(2c)でも同じ機能を果たしている。言い換えれば、「あいにく」は否定のスコープに入らないのである。この結果は、FG派研究者のJan Nuyt (1993)の認識的モダリティを表す副詞「probably」の考えに比較することができる。Jan Nuyt (1993)では、「probably」という英語副詞が疑問文に現れないし、それ自身が否定されないのである。（Jan Nuyt (1993: 935-936)）

- (3) Is it probable that they ran out of fuel?
(4) a. *Probably they ran out of fuel?
b. *Did they probably ran out of fuel?
(5) It is improbable that they ran out of fuel
(6) a. *Improbably they ran out of fuel
b. *They improbably ran out of fuel

認識的モダリティを疑問・否定する際には、副詞「probably」より認識的モダリティを表す形容詞「probable」の文型を用いることになる。

各グループ副詞の特徴は、次のようにまとめられる。

- 1) グループ A11 とグループ A13 の副詞「たぶん、おそらく、きっと、かならず、ぜったい、まさか、さぞ、どうも、どうやら」は、過去文に現れないし、推量的・証拠的な機能を持つものである。
- 2) グループ A22 の副詞「あいにく、さいわい、賢明にも」は、過去文に現れるし、命題内容に対して話し手の主観的／心理的な評価の態度を付け加えるものである。
- 3) グループ A23 の副詞「あきらかに、たしかに、たしか、もちろん、事実、じつは」は、過去文に現れるし、真理判断にかかわる認識的機能を示すものである。また、グループ A23 の中には文のスコープを超える用法を持つものが見つかる。
- 4) グループ B1 の副詞「どうか、どうぞ」は命令文系統の発話内力を特定化するものであり、グループ B2 の副詞「ぜひ」は特殊な強調詞的機能を持つものである。

日本語副詞と文型の共起関係から見ると、モダリティ・評価を表す日本語副詞が文型に支配されて副の役割を担うものにすぎないとは言えるが、実際は、副詞が名詞・動詞・形容詞と同じように語彙的な意味を含んでいるのだから、多少モダリティを表す役割もあるものである。英語では、副詞のほとんどが形容詞から派生したものであり、語幹の形容詞の意味を含んでいるものである。日本語では、副詞が音・声・様子を写したり（「うろうろ」「ぐうぐう」など）名詞や動詞を組み合わせたり（「相変わらず」など）など様々な方法で作られたものだから、日本語副詞の語彙的な意味がその音・声・様子を指すものや名詞や動詞の組合せなどから来たものと言える。しかし、日本語と英語の相違は、副詞の担うモダリティを表す役割の重要度である。英語では、コミュニケーション状況によって文の発話内効力を推量させる場合が多いが、日本語では、発話内効力が文末ではっきりと表されるので、コミュニケーション状況によって文の発話内効力を推量させる場合が英語より少ない。

森本（1997）の SSA 副詞の研究は、各グループ副詞のコミュニケーション上の機能を分析したが、分類の方が統語論的な基準、すなわち、日本語の文型によって行われたのである。外国人日本語学習者向けの文法説明のために理論枠組を発展させる際には、枠組の普遍性、すなわち、ある言語の文法に引きつけて考えないこと、に留意しなければならないのである。それゆえ、FG に基づいて新しい理論枠組を発展させてその枠組でモダリティ・評価を表す日本語副詞の再検討を行うことにする。

1.3 データの収集

データの収集は、まず飛田良文・浅田秀子の「現代副詞用法辞典」からモダリティ・評価を表す副詞を収集することにする。副詞を収集する際には、下記の基準に従って行なった。

1) 副詞の形式的性質は「不変性 (invariability)」である。「不変性」とは、名詞と同じように格前置詞・格助詞または数・性などを表す語尾を付けないし、動詞・形容詞のように時制・人称など語尾も付けないということである。そして、上記の辞典に載っている「案外」「意外」など名詞・形容動詞と同じように（名詞・動詞の修飾語の機能を示すように）「な」「に」「の」をつけたものは、副詞より名詞・形容動詞と判断されて、研究範囲外とされた。さらに、「あわよくば」など形容詞の活用形から作られた「連語」も研究範囲外である。

なお、「連語」と「副詞」の区別は、語形だけでなく文における「機能」も合わせて判断することである。そして、本研究では「ひょっとすると」「ひょっとしたら」を「副詞」として含めることとする。詳細は第3章『モダリティ・主観評価を表す日本語副詞』を参照のこと。

2) 副詞の主要な機能的性質は「非名詞成分の修飾語」である。ただし、「副詞」という名をつける語が述語や修飾節の主要語、名詞の修飾語などとして使われる場合も多い。本研究では、文の修飾語としてモダリティ・評価を表す日本語副詞を対象として扱う。そして、述語や修飾節の主要語、名詞の修飾語などとして使われる場合は研究範囲外にする。例えば、

- (7) 彼女はさんざん迷ったあげく安物を選んだ。 (修飾節の主要語)
- (8) デートをすっぽかされたら怒るのはあたりまえだ。 (述語)
- (9) この作文にはいくつかの文法的なミスがある。 (名詞の修飾語)

上記の「あげく」「あたりまえ」「いくつか」の用法は研究範囲外とする。

3) 「否定なし」「否が応でも」など二つ以上の単語から作られたものは、副詞より「連語」と判断し研究範囲外とする。

次に、検索エンジン「Google」を使用することにする。収集されたモダリティ・評価を表す副詞を入力して、例文を収集して検索結果を上記の基準によって分析することにする。

1.4 章の構成

第2章では、本研究のために発展させた理論枠組を説明することにする。Simon C. Dik のFG (すなわち、標準FG) からモダリティや副詞に関わる他人のFG派研究者の考えを述べた上で、本研究のために発展させた独特の理論枠組を説明する。

第3章では、文例の分析過程を示してモダリティ・評価を表す日本語副詞の実践研究の結

果を詳細に説明することにする。対象副詞の例文を示す順序は、五十音の順で呈示する。

第4章では結論である。研究結果をまとめて、外国人日本語学習者向けの文法説明のために研究結果の応用について論じることにする。

第2章 理論枠組

2.0 はじめに

第2章では、本研究のために発展させた理論枠組を説明することにする。2.1では、Simon C. Dik (1997a; 1997b) における標準FGの理論を概説する。2.2では、「モダリティ」「副詞」に関する、他のFG派研究者の考えを説明する。2.3では、本研究のために発展させた理論枠組を説明する。

2.1 標準Functional Grammarの概説

2.1.1 FGとは何か

機能的なアプローチによって自然言語を研究するにあたっては、最も重要な問題は次のように提起される。すなわち「話し手と聞き手は、どのように言語表現を通じて通信するのか?」「どのように相手からの情報を理解するのか?」「どのように言語で相手の考えや感じを影響するのか?」などという問題が、このような研究では解決されなければならないものとなる。

以前は、これらの問題を解決するために、「自然言語使用者モデル (model of natural language user)」を作って自然言語処理の働きを研究する方法が行われていた。しかし、自然言語使用者モデルを作るにあたっては、人間が「言語」だけでなく、「論理」「認識」「社会習慣の知識」など様々な「機能」も使用して通信することに留意しなければならない。上記の様々な機能は、互いに関連し合って自然言語使用者モデルを構成しているのである。

このような自然言語使用者モデル自身が複雑な仕組みなので、自然言語使用者モデルの研究では小さなタスクに分けて研究を行うことが望ましい。Functional Grammar (FG) は、

「言語」の文法的な組織を中心として言語表現の製作・解釈の研究のために作られた理論、つまり、自然言語使用者モデルの一部「言語機能単位」を研究する理論である。FGの名は、「機能的パラダイム (Functional Paradigm)」から来たものである。機能的パラダイムとは、「言語が人間の相互通信の道具だ」という概念的枠組のことである。

相互通信とは、「規則」や「規準」「ならわし」のもとに二人以上の参加者が言語表現を使って通信することである。従って、相互通信の道具として使われた言語表現 (linguistic expression) も「原則」や「規則」で作り上げられたものである。すなわち、言語表現が「言語表現の成分に関する規則 (意味・統語・語形・音韻規則)」と「言語表現の用法に関する規則 (語用規則)」のもとに製作・解釈されたものなのである。そして、機能的パラダイムにとっては、言語の理論が現実状況で言語の使い方の観点から言語表現の形成に関する規則、つまり、「文法規則」を説明するように発展させるべきものである。「文構造」が「意味」に支配されて、「意味」が「語用」に支配されるという自然言語の研究観点は、Functional Grammar の立場のものである。

従って、Functional Grammar を発展させるにあたっては、

- 1) 理論が現実状況で言語の使い方に関して言語表現の形成規則 (語形・文構造・成分順序の規則など) を説明する
- 2) 理論が言語表現の製作・解釈にかかわる心理的メカニズムに関連する
- 3) 理論が様々なタイプの自然言語を説明するように応用することができる

という三つの「妥当性の水準」を維持することが必要となる。上記の妥当性は、それぞれ順に、「語用的妥当性 (Pragmatic Adequacy)」「心理的妥当性 (Psychological Adequacy)」「類型的妥当性 (Typological Adequacy)」と呼ばれる。

ただし、類型的妥当性を最大限に発展させることは、一定の「抽象性の程度」が必要である。例えば、「定 (definite)」を示すように、英語では名詞の前に定冠詞の「the」をつけるが、デンマーク語では名詞の後ろに語尾の「-et」をつける。これらの言語における「定」を示す現象を説明するように、「d (definite の略)」を使って「定」を示すよう

に用いる。

- (1) 英語 d [house] → the house
デンマーク語 d [hus-] → hus-et ‘the house’

そして、英語にもデンマーク語にも名詞の「定」を表す方法があるが、両方の言語の違いは、英語では定冠詞を、デンマーク語では語尾を使うことである。言い換えれば、両方の言語両方の言語の違いは「定」の表し方なのだと説明することができる。

しかし、理論は抽象性の程度が高くなりすぎると、望ましくない結論に到達することがある。論理学に基づき、「自然言語が曖昧で本当の意味・論理的意義を直接に表すものではない」、あるいは「二つ以上の言語表現が実は同じ論理的な関係を表すことがある」という考えによって自然言語を研究することは、「論理的な関係」だけに注目して「話し手の視点」を見落としたまま結果にいたることがある。例えば、

- (2) a. I met a boy who was carrying a green uniform.
 b. I met a boy carrying a green uniform.

Chomsky の変形文法にとっては、(2a)も (2b) も同じ論理的な関係、すなわち、両方が同じ「深層構造 (deep structure)」を持っている。さらに、(2b) は(2a)における「who was」を削除して製作されたものだと分析した。つまり、(2b) は (2a)から派生した (変形規則「削除 (deletion)」によって変形された) ものだと結論付けてしている。そして、Chomsky にとっては、両者の相違が「表層構造 (surface structure)」の相違にすぎないのである。

しかし、このような分析は、残念なことに「関係節 (relative clause)」と「現在分詞

(present participle)」の名詞修飾語の使い分けを支配している「話し手の伝えたい意義」を見落としている。(2a)では、「私は出会った男の子は他の男の子ではなくて緑色の制服を持ち運んだ男の子だ」と強調するために、関係節の名詞修飾語を用いている。一方(2b)では、単に「私は緑色の制服を持ち運ぶ男の子に出会った」を表すべく、「性質(他のものと区別するありがた)」を表す現在分詞名詞修飾語を使用している。このように、違った意義を伝えたいという話し手の意識は、別の構造を使い分けの要因となる。

(2a)と(2b)は、FGの基本構造(underlying clause structure)で次のように表示された。

(3) a. a boy who was carrying a green uniform

[ilx_i : boy : [Past e: [Prog (carry) (Ax_i) (a green uniform)]]]

(「A」は「anaphora(前方照応)」を示す)

b. a boy carrying a green uniform

[ilx_i : boy : [e: [Prog (carry) (Ax_i) (a green uniform)]]]

以上、構造の相違から明らかなように、FGでは「Take language seriously(言語を慎重にして)」という信念は維持されなければならないものである。

2.1.2. 標準FGの枠組

標準FGの枠組を理解するためには、まずFGの相互通信モデルを理解することが必要となる。FGの相互通信モデルは次のように書き表される。

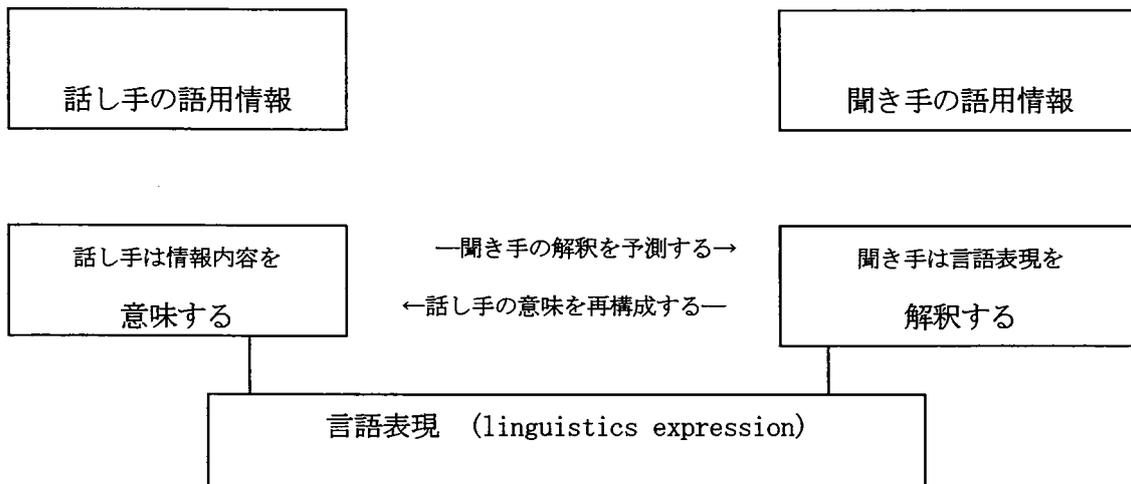
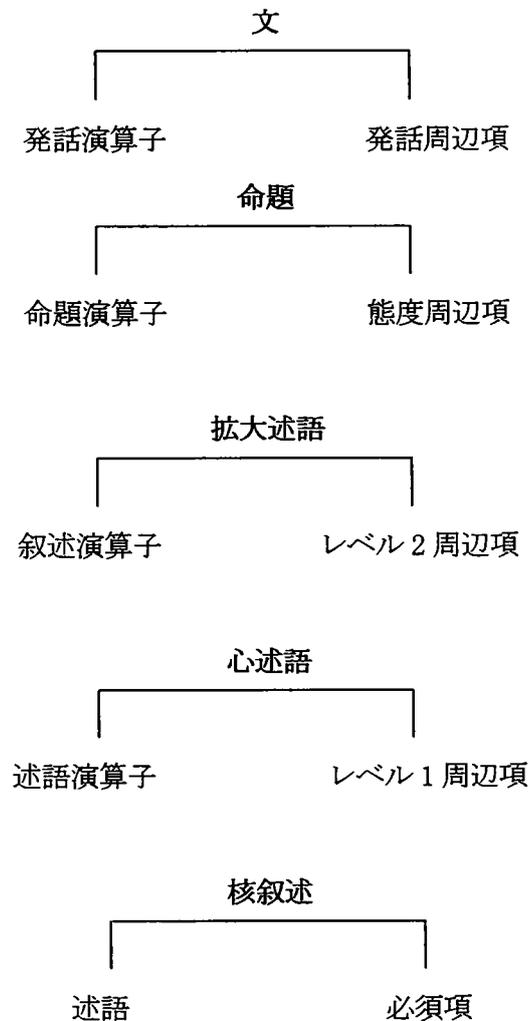


図1. FGの相互通信モデル

相互通信モデルによれば、話し手も聞き手も「語用情報 (pragmatic information)」を有している。「語用情報」というのは、「前から知っている一般的な (世間についての) 情報」「場面から取った通信状況についての情報」「文脈から取った情報」から構成したものである。話し手の方は、「聞き手が何を知っているのか」と考えて聞き手の解釈能力・範囲を予測してから、自分が意味したい情報を形成して言語表現を製作する。一方、聞き手は、「話し手が何を意味しているのか」と考えて話し手の意味した内容を再構成してから、言語表現を解釈して情報内容を受け取る。その後、聞き手の解釈が話し手の伝えたい意味に一致しないと、「誤解」が起こるのである。

次は、FGの言語表現分析枠組を説明することにする。自然言語の談話は、「文 (clause)」と、「感嘆詞」「挨拶言葉」「接続詞」など「文外成分 (extra-clausal constituents)」という二種類の要素から構成されたものである。文を分析するには、「基本構造 (underlying clause structure)」に描写して、文の核心から「核叙述」「心叙述」「拡大叙述」「命題」「文」5つの階層に区分する。基本構造の組織は、最初に、次のように書き表される。

(4)



以下、核叙述の階層から説明することにする。「核叙述 (nuclear predication)」というのは、「述語」と一つ以上の「必須項 (arguments)」から構成して「単なる事象」を描写する階層である。そのうち「述語 (predicate)」は、事象における参加者の性質・関係を表す成分のことである。述語は、「基本述語」と「派生述語」に分けられる。基本述語は、「動詞的」「名詞的」「形容詞的」三つのタイプに類別されて、それぞれ次のように定義されている。(Dik 1997a: 194)

(5) a. A Verbal predicate (V) is a predicate which is primarily used in predicative function.

(動詞的述語とは、主に文の述語として用いられる述語のことである)

b. A Nominal predicate (N) is a predicate which is primarily used as the head of a term.

(名詞的述語とは、主に項の主要語として用いられる述語のことである)

c. An Adjectival predicate (A) is a predicate which is primarily used in attributive function.

(形容詞的述語とは、主に限定詞として用いられる述語のことである)

一方、派生述語とは、基本述語から「動詞化」「名詞化」「可能形」「使役形」など、述語形成規則 (predicate formation rules) によって製作された新しい述語のことである。派生述語の例えは、「勉強する」「読める」「行かせる」など基本述語の「勉強」「読む」「行く」から作られたものである。

「必須項 (arguments)」とは、ある事象における不可欠で必須な参加者を表す成分のことである。例えば、何を食えることでは「ものを食べる人」と「食べられるもの」この二つの参加者がなくてはならないものである。つまり核叙述を形成する際には、述語と一つ以上の必須項を組み合わせ、「事象のタイプ」によって必須項に「動作主」「力」「目標」「受取人」「(存在の) 場所」など別々の「意味機能 (semantic functions)」を付けることが必要である。

なお、事象のタイプは、二つのパラメーター「±con (control の略)」と「±dyn (dynamic の略)」によって「動作」「定置」「過程」「状態」という四つのタイプに分けられる。

- (6)
- | | | |
|----|--|-------------|
| a. | John was reading a book (動作) | [+con、+dyn] |
| b. | John kept his money in an old sock. (定置) | [+con、-dyn] |
| c. | The earthquake moved the rock. (過程) | [-con、+dyn] |
| d. | The rock moved. (過程) | |
| e. | The cup was on the table. (状態) | [-con、-dyn] |

[+con] は、「参加者が自分の思うとおりに事象を動かすことができる」ことを示す。

[+dyn] は、「(特定の期間に) 事象には動きがある」ことを示す。

上記の核叙述には、「進行・継続性」「様態」「道具」「利益者」「相手・片方」「(移動の)出発点・通路・終点」など事象の特徴を表すものを添えると「心叙述」となる。文法的方法で表すもの(継続形など)は「述語演算子(predicate operator)」で示し、語彙的方法で表すもの(道具・利益者・相手・片方を示す前置詞・格助詞のつけた名詞や様態を表す副詞)は「レベル1周辺項(level-1 satellites)」で示す。例えば、

(7) [Prog (cut [V]) (he)Ag (meat)Go (a knife)Instr]

'he is cutting meat with a knife'

Prog =Progressive (進行)

Ag =Agent (動作主)

Go =Goal (目標)

Instr =Instrument (道具)

(7)では、事象の「進行性」が「be+V-ing」という「継続形」で表すものなので、基本構造においては述語演算子「Prog」で示される。一方、動作（事象）を行うために使った「道具」は、前置詞句「with a knife」で表される。そして、「with a knife」は基本構造において、「Instr」という意味機能のつけた周辺項「(a knife)Instr」である。

心叙述に、さらに「時・頻度」「(事象の起こる)場所・環境」「目的・原因・理由・結果」など事象の「位置」を表すものを添えると、「拡大叙述」が構成される。文法的方法で表すもの（「過去形」「現在形」など）は「叙述演算子 (predication operator)」で示し、語彙的方法で表すもの（場所・環境・目的・原因・理由・結果を表す名詞・節など）は「レベル2周辺項 (level-2 satellites)」で示す。この拡大叙述の階層では、必ず項(ほとんどは必須項)に「主語」や「客語」といった、「観点機能 (perspective functions)」が付加される。例えば、

(8) [Past e: [Prog (read [V]) (he)AgSubj (a book)GoObj](in the library)Loc]
 'he was reading a book in the library'

e =predication (叙述)
 Past =past tense (過去時制)
 Loc =location (場所)
 Subj =subject (主語)
 Obj =object (客語)

(8)では、事象の「過去時制」が「be」の過去形「was」で表されるので、基本構造においては叙述演算子「Past」で示される。一方、動作（事象）を行う「場所」は、前置詞句「in the library」で表すものである。そして、「in the library」は、基本構造において「Loc」という意味機能をつけた周辺項「(in the library)Loc」で示すことである。さらに、動作主 (Ag) の必須項「he」と目標 (Go) の必須項「a book」には、デフォルトの観点「動作主から目標にかけて」を表すために、それぞれ「主語」と「客語」の観点機能がつけられ

る。これとは逆に、目標の必須項に「主語」をつけると、「目標から始まる」という観点を表す文、すなわち「受動態」の文を作ることになる。例えば、

- (9) [Past e: [Prog (read [V]) (he)Ag (the book)GoSubj]]
'the book had been reading by him'

以上のような、拡大叙述の階層は「事象」を完全に描写する階層とされる。

拡大叙述に、「可能・願望」「経験・推測・伝聞」など、命題の真偽・確実さに対する主観態度を表すものを添えると、「命題」となる。文法的方法で表すもの（命題が真になる可能性を示す法動詞など）は「命題演算子 (propositional operator)」で示し、語彙的方法で表すもの（態度・評価を表す副詞など）は「態度周辺項 (attitudinal satellites)」で示す。例えば、

- (10) [X:[PresPerf e: [(fail[V]) (John)ProcSubj]](apparently)Attitude]
'Apparently, John has failed'

X = proposition (命題)
Pres = present tense (現在時制)
Perf = perfect aspect (完了アスペクト)
Proc = processed (過程経験者)

(10)では、命題に対する話し手の主観態度「この命題が真になることが明らかだ」を表す「apparently」は、基本構造において「Attitude」という意味機能が付加された周辺項「(apparently)Attitude」で示される。

命題の階層に、「平叙的」「疑問的」「命令的」など発話内効力を表すものを添えると、「文」となる。文法的方法で表すもの（「疑問形」「命令形」など）は「発話演算子 (illocutionary operator)」で示し、語彙的方法で表すもの（発言副詞など）は「発話周辺項 (illocutionary satellites)」で示す。この文の階層では、文におけるいずれの成分に「話題」または「焦点」という「語用機能 (pragmatic functions)」を付加することができる。例えば、

- (11) [Decl E: [X: [Pres e: [(stupid[A]) (John)ØSubjTop]]] (Frankly)Manner]
 ‘Frankly, John is stupid’

E = clause (文)
 Decl = declarative (平叙的)
 Ø = zero (状態経験者)
 Top = topic (話題)

(11)では、発言の様態を表す「Frankly」は、基本構造において「Manner」という意味機能をつけた発話周辺項「(Frankly)Manner」で示される。さらに、動作主 (Ag) の必須項「John」には、「この文は John についてのことだ」と表すように、「話題 (Top)」という語用機能が付加されるのである。

なお、FG では、自然言語における発話内効力を研究する際には、まず相互通信モデルによって発話内効力を「話し手が意味したい発話内効力」「言語表現で表す発話内効力」「聞き手に解釈された発話内効力」と三つに区別し、中でも「語表現で表す発話内効力」について主に論じられている。言語表現で表す発話内効力は、諸言語に現れる基本発言文型によって、次のように三つの「基本発話内効力」に分かれている。(Dik 1997b: 239)

(12) Declarative: S wishes A to add the content of the linguistic expression to his pragmatic information.

(「平叙的」とは、話し手が聞き手に言語表現の内容を伝えさせるように用いる発話内効力のことである)

Interrogative: S wishes A to provide him with the verbal information as requested in the linguistic information.

(「疑問的」とは、話し手が言語表現で聞き手に要求された情報を教えさせてもらうように用いる発話内効力のことである)

Imperative: S wishes A to perform the controlled SoA as specified in the linguistic expression.

(「命令的」とは、話し手が言語表現で聞き手に特定した動作・定置を行わせるように用いる発話内効力のことである)

なお、数多くの言語（タミル語やエジプト語など）では、「感嘆」を表す文型も発見されている。（Dik 1997b: 239）

(13) Exclamative: S wishes A to know that the content of the linguistic expression impresses S as surprising, unexpected, or otherwise worthy of notice.

(「感嘆的」とは、話し手が聞き手に「自分が言語表現の内容に「驚くべき」「思いがけない」「注目すべき」などと感じた」と知らせるように用いる発話内効力のことである)

各言語では、基本発言文型に基づいて「付加疑問」「依頼」「感嘆」「反語」など、様々な「派生発話内効力」を表す文を製作するように使われる規則がある。

文の基本構造から言語表現を形成する際には、「表現規則 (expression rules)」を適用し、「語形」「成分順序」「韻律」を設定することによって完全な表現となる。例えば、

(14) 語形 (格助詞・前置詞の使用も含む) にかかわる表現規則の例え

a. d m [girl] = *the girls*

d = definite (定)

m = plural (複数)

b. Rec [the man] = *to the man*

Rec = recipient (受取人)

(15) 成分順序にかかわる表現規則の例え

{had [Vf], cooked[Vi], John(Subj), the potatoes(Obj)}

ordering template: 1 2 3 4

placement rule: Vf := 2

Vi := 3

Subj:= 1

Obj:= 4

output sequence: *John had cooked the potatoes.*

(16) 韻律にかかわる表現規則の例え

a. You don' t like the soup \ (平叙)

b. You don' t like the soup / (疑問)

2.1.3. 「成分順序原則」について

では、FG における「成分順序原則 (Constituent ordering principles)」について検討しよう。FG では、文における色々な成分の順序が、「機能（「意味機能」「観点機能」「語用機能」のいずれ）」と、ある程度関係する。言語によって異なる「主語-動詞-客語」か「主語-客語-動詞」の順序テンプレートにもかかわらず、成分の順序はその成分と「中心となる成分」の間隔や、他の成分との相対的な「複雑さ」によって説明することが可能である。ただし、ある文における成分の順序がどのようになるのかということが、色々な成分順序原則の働きの結果によることには留意しなければならない。

では、成分順序の一般原則を検討しよう。

(GP1) The Principle of Iconic Ordering

Constituents conform to (GP1) when their ordering in one way or another iconically reflects the semantic content of the expression in which they occur.

アイコン的な順序の原則

(GP1)に従うとは、成分の順序が表現の意味内容をアイコン的に反映することである。

「アイコン的」というのは、成分の順序が「記号」として成分と成分の意味的な関係を表すように用いられることを意味する。例えば、

(17) After John had arrived, the meeting started.

(18) The meeting started before John arrived.

(17)と(18)では、先に起こった事象を表す節が、後に起こった事象を表す節の前に位置している。いずれかの事象を強調する場合を除いて、節の順序は事象の順序を反映している。言い換えれば、事象の(時間的な)順序はアイコン的に成分の順序で表示されるのである。

(GP2) The Principle of Linear Ordering

Constituents conform to (GP2) when their linear order is fixed, no matter which position they take relative to the head.

線形順序の原則

(GP2)に従うとは、中心との相対的な位置にかかわらず、成分の線形順序が固定することである。

線形順序の原則は、次のように説明できる。

(19) xyzH, xyHz, xHyz, Hxyz

(19)では、三つの成分「x」「y」「z」の順序は、中心(H)の前か後ろに位置するにもかかわらず、常に「x-y-z」になるのである。(19)と同じような順序は(GP2)によって成り立つといえる。

(GP3) The Principle of Centripetal Orientation

Constituents conform to (GP3) when their ordering is determined by their relative distance from the head, which may lead to “mirror image” ordering around the head.

求心定位の原則

(GP3)に従うとは、成分の順序が中心との相対的な距離によって定められて、中心の周辺に「鏡に映る像」のような順序になることである。

求心定位の原則に従う場合は、「x」「y」「z」が次のような順序で並ぶ。

(20) zyxH, zyHx, zHxy, Hxyz

(20)の成分順序は、次のように説明できる。すなわち、中心(H)との相対的な距離によって、「x」「y」「z」の成分順序がこのように定められる。ここでは中心との相対的な位置にかかわらず、「x」が中心に一番近い。そして「y」は「x」より、「z」は「y」より中心から離れる。結果として、求心定位の原則に従う成分順序パターンは、次のように書き表すことができる。

(21)

z y x x y z

3 2 1 H 1 2 3

(GP4) The Principle of Domain Integrity

Constituents prefer to remain within their proper domain; domains prefer not to be interrupted by constituents from other domains.

領域保全の原則

成分は自分の領域に留まる方を選び、領域は他の領域の成分に割り込まれない方が選択される。

(GP5) The Principle of Head Proximity

Constituents ordering rules conspire to keep the heads of different domains as closely together as possible.

中心接近の原則

成分の順序には、できるだけ領域の中心を他の領域の中心の近くに置くことに協力する規則がある。

例えば、次の例は成分順序の規則に従う場合とすることができる。

(22) *the very young man sneezed suddenly.*

(22)では、「young」「man」「sneezed」が、それぞれ修飾語「very」「very young」「suddenly」の主要語（中心）である。「very」が「young」の程度を、「very young」全体が「man」の特徴を表す。「suddenly」の方は「sneezed」の様態を表す。中心接近の原則に従うように、「young」「man」「sneezed」三つの主要語は隣接している。

(GP6) The Principle of Functional Stability

Constituents with the same functional specification are preferably placed in the same position.

機能安定の原則

同じ機能を持っている成分は、同じ位置にあることが選好される。

例えば、「主語」と「客語」の区別がある諸言語では、必ず「主語位置」と「客語位置」の区別も存在する。

(GP7) The Principle of Pragmatic Highlighting

Constituents with special pragmatic functionality (New Topic, Given Topic, Completive Focus, Contrastive Focus) are preferably placed in “special position”, including, at least, the clause-initial position.

語用顕示の原則

特別な語用機能（新しい話題・与えられた話題・完成焦点・対照焦点）を成分は、「特別位置」（文頭を含めて）に置かれる。

なお、語用顕示の原則に従う際には、他の成分順序原則が無視されることがある。例えば、

- (23) a. The man (GivTop) was in the house.
b. In the house was a man (NewTop).

通常は、文の主語が必ず文頭に置かれるが、(23b)では、「新しい話題」の語用機能を顕示させるように、文の主語「a man」が文末に置かれることがある。「新しい話題」は、「聞き手に新しい話題を紹介する」という意味を暗示している。

(GP8) The Principle of Cross Domain Harmony

Each language has a certain degree of consistency in either using Prefield or Postfield ordering across the different ordering domains.

領域間一致の原則

各言語では、領域の間における「前方」か「後方」の順序を使用することには、ある程度の一致がある。

そして、文における成分順序が「前方」（成分が自分の中心（述語）の前に置かれる）になると、項における成分順序も「前方」（修飾語が自分の中心（主要語）の前に置かれる）になる可能性が高い。

以上のような「前方 (Prefield)」と「後方 (Postfield)」という順序は、言語タイプの区別基準とすることも可能である。従って、ある言語が「前方言語 (Prefield

language) 」とか「後方言語 (Postfield language) 」とか呼ばれることもある。ただし、二つの言語タイプの特徴をもっている言語もある。英語がその場合の一例である。具体例として、以下のようなパターンを示すことができる。

(24)

PREFIELD

POSTFIELD

Object-Verb (客語 - 述語)

Verb-Object (述語 - 客語)

Possessor-Head (所有者 - 主要語)

Head-Possessor (主要語-所有者)

Adjective-Noun (形容詞 - 名詞)

Noun-Adjective (名詞 - 形容詞)

Adverb-Predicate (副詞 - 述語)

Predicate-Adverb (述語 - 副詞)

上記のパターンから見ると、日本語が完全に「前方言語」となる。

- (25) a. ご飯を食べる (客語 - 述語)
 b. チンさんの傘 (所有者 - 主要語)
 c. 赤い帽子 (形容詞 - 名詞)
 d. 早く起きる (副詞 - 述語)
 すごくかわいい

ただし、前述のように、英語において「前方」と「後方」の順序も見つかる。英語の文構造が「V-O」で「後方」になっても、形容詞と名詞の成分順序がいつも「A-N」で「前方」になる。また、副詞と述語の順序は、述語が動詞になる場合副詞が後方に置かれるが、述語が形容詞（過去分詞を含める）になったら副詞が前方に置かれる。同様に、ものの所有者を示す際にも、前方の「所有形容詞」又は後方の「所有代名詞」二つの表し方が選べる。

- (26) a. have a lunch (Postfield)
 b. my car (Prefield)
 the car of mine (Postfield)
 c. a red hat (Prefield)
 d. play clumsily (Postfield)
 extremely clumsy (Prefield)

しかしながら、英語は、ある程度までは「後方言語」の特徴の強い言語であるといえると考えられる。

(GP9) The Principle of Increasing Complexity

There is a preference for ordering constituents in an order of increasing complexity.

複雑さ増進の原則

成分は、簡単なものから複雑なものの順に並ぶ。

そして、複雑さ増進の原則に従う成分順序パターンは、次のように書き表すことができる、

(27) [-][--][—][————][—————]

本稿では、実践研究においては、ある日本語副詞がモダリティ・主観評価の副詞かどうか分析する際には、副詞の意味だけでなくその副詞と他の成分、特に他の周辺項や文の述語との相対的についても考察する。そして、FGの「成分順序原則」も応用し、「モダリティ・主観評価の副詞テスト」の基準として実践研究を行うことにする。詳細は、2.3で説明することにする。

2.1.4. 標準FGの観点から見るモダリティ

「モダリティ」という用語は、意味も使用範囲も研究者によって異なるものである。そして、FGでは、「モダリティ」と呼ばれるものは、包括的な定義を与えられうるものではないが、さしあたりモダリティを分類する」という考えを基として、モダリティを次のように分類されている。(Dik 1997a: 241-242)

レベル1－内在的モダリティ (Inherent modality)

「内在的モダリティ」とは、参加者と自分が体得した事象の関係を定義するモダリティのことである。内在的モダリティには、「能力」「希望」など、述語の内的構造に含むモダリティがある。

レベル2－客体的モダリティ (Objective modality)

「客体的モダリティ」とは、事象がそうなる（起こる）可能性の判断を表すモダリティのことである。客体的モダリティは、「認識的客体モダリティ (epistemic objective modality)」と「義務的客体モダリティ (deontic objective modality)」に分けられる。

「認識的客体モダリティ」とは、一般の知識によって「確実 (Certain)」「可能 (Possible)」「不可能 (Impossible)」など 事象の現実性に対する判断を表すモダリティのことである。

「義務的客体モダリティ」とは、習慣、決まりによって「強制 (Obligatory)」「適切 (Acceptable)」「禁止 (Forbidden)」など 事象の現実性 に対する判断を表すモダリティのことである。

客体モダリティを表す文法的方法（英語の法動詞「must」など）は、拡大叙述に属する「叙述演算子」に描写することになる。

レベル3－主體的・証拠的モダリティ (Subjective modalities, Evidential modalities)

このレベルのモダリティは、「命題 (proposition)」の真偽に対する話し手の意見を

表すように用いられるものである。

「主體的モダリティ」とは、「可能」「願望」など「命題の真偽」に対する話し手の確信・態度を表すモダリティのことである。

「証拠的モダリティ」とは、「経験 (Experience)」「推測 (Inference)」「伝聞 (Hearsay)」など情報の習得方法によって命題の確実度に対する評価を表すモダリティのことである。

主体・証拠モダリティを表す文的方法 (英語の助動詞「may」など) は、命題の階層に属する「命題演算子」によって描写することになる。

2.2 「モダリティ」「副詞」に関する FG 派研究者の先行研究

2.2.1 Jan Nuyts (1993)

モダリティのことを研究する際には、「モダリティというものは、表し方がいくつあるのか？」という問題から研究を始めることが、一番適切な方法である。Jan Nuyts (1993) では、「認識的モダリティ (epistemic modality)」の表し方を説明するために下記の例をあげた。(Jan Nuyts : 1993, p. 935)

- (28) It's probable that they ran out of fuel.
- (29) Probably they ran out of fuel.
- (30) They may have run out of fuel.
- (31) I think they have run out of fuel.

(28)(29)(30)(31)では、それぞれ、「形容詞」「副詞」「法助動詞」「認知動詞」が認識的モダリティを表すように用いられている。(28)と(29)における「probable」と「probably」

は、意味論の方面から見るとよく似ているが、統語論の方面では違った点が多い。違った表し方によって、どのような意味の相違があるのかという問題を考察するために、認識的形容詞と認識的副詞の使い分けが三つの要因「談話機能性 (discourse functionality)」「証拠性とモダリティの相互作用 (the interaction between evidentiality and modality)」「遂行性 (performativity)」で支配されたという説明が与えられている。

談話機能性

「談話機能性」というのは、談話・会話におけるその認識的モダリティの「重要性」のことである。文の述語として認識的形容詞の用いる(28)「It's probable that they ran out of fuel」は、(29)「Probably they ran out of fuel」の分裂文的な表現であり、その認識的モダリティを重要な情報として強調するように用いられたものである。

証拠性とモダリティの相互作用

まず、以下の例文をとりあげる。(Jan Nuyts : 1993, p. 950)

- (32) A: It's probable that they ran out of fuel.
B: Who says so?
- (33) A: Probably they ran out of fuel.
B: ?Who says so?
B' : Do you think so?

(33)のA文「Probably they ran out of fuel」は、「表現された意見の確かさは、話し手自身の責任によるものだ」という意味を暗示している。そして、(33)のA文はBよりも、B'の質問「Do you think so?」を用いられやすい。一方、(33)のA文に対するBの質問「Who says so?」の方は、「皮肉」あるいは「間接質問」を表すように用いられる傾向が強い。

それに反して、(32)のA文「It's probable that they ran out of fuel」は、表現され

た意見の「間主観性 (intersubjectivity) 」を示し、「A の話し手が他人と意見を交換した上で述べたものだ」という意味を暗示するものである。そして、意見・情報の出どころを問うために、B の質問「Who says so?」を用いることは当然である。

遂行性

モダリティ表現の使い方は、「描写的 (descriptive) 」と「遂行的 (performative) 」に分類される。「描写的 (descriptive) 」とは、話し手がただモダリティを含んでいる事象を報道するために使われたモダリティ表現のことである。一方、「遂行的 (performative) 」とは、話し手が事象に対する自分の態度を述べるために使われたモダリティ表現のことである。しかし、モダリティ表現の使い方を二つに分けるからといって、「認識的モダリティは二種類がある」というわけではない。認識的形容詞の表現「It's probable that they ran out of fuel」は、描写的にも遂行的にも使われることができる。それとは対照的に、認識的副詞の表現「Probably they ran out of fuel」の方は、遂行的のみに使われる。下記の(31)と(32)を比較されたい。(Jan Nuyts : 1993, p. 953)

(34) If it's probable that they ran out of fuel, I'll send a tanker after them.

(35) *If probably they ran out of fuel, I'll send a tanker after them.

仮定条件文は、「状況がそうなったら、状況に対応する動作を行う」という意味を伝えるように用いられるものである。そして、条件節におけるモダリティ表現は「遂行的」というより、「描写的」に用いられるものである。

そして、モダリティ形容詞とモダリティ副詞の使い分け方は、認識的モダリティの意味上の相違よりも、むしろ語用的な要素によって定められている。

なお、Jan Nuyts (1993)では、修飾成分の支配層順序 (the hierarchical ordering of qualifications) について言及している。そこでは、修飾成分の支配層の考えについて次のように述べられている。

1. 伝統概念における「主観性 (subjectivity)」と「客観性 (objectivity)」の区別は、認識的モダリティには「主観的モダリティ」と「客観的モダリティ」二種類があるという誤解に導く。実は、認識的モダリティの判断は、証拠の性質によって異なるものである。認識的モダリティの判断は、話し手が自分だけの証拠によるものを「主観的」、話し手が二人以上の人が知っている証拠によるものを「客観的」と呼ぶ。しかし、後者は「客観的」とではなく、むしろ「間主観的」と呼んだ方がいい。「主観性」と、「客観性」つまり「間主観的」の区別は、認識的モダリティの区別でなく、「証拠性」の範囲における区別、つまり、「認識的モダリティと証拠性の相互作用」に依拠しているのである。結果として、FG における「主観的モダリティ」の設定は不必要なことになる。

2. 意味の上で、認識的モダリティと「肯定と否定」の極性の間には親密な関係がある。すなわち、「肯定」と「否定」の極性が、それぞれ「物事が確かにそうなる」「物事が確かにそうならない」という、認識的モダリティの極端を表すように用いられるのである。

3. 遂行的な認識的モダリティは、常に「非過去 (現在または未来)」の時制とともに用いられる。言い換えれば、遂行的な認識的モダリティの方が時制の選択に影響するのである。(Jan Nuyts : 1993, p. 960)

(36) John will probably go to the movies tomorrow.

(36)は、「ジョンが明日に映画館へ行くことが確からしい」と解釈される。つまり、「ジョンが明日に映画館へ行く」ということ全体について、起こる見込みを表すのである。そして、認識的モダリティを表す法動詞 (例. might (may の過去形) は、実際は「過去時制」よりも、「やや低い確実さ」を表す。

なお、認識的モダリティは義務的モダリティの選択に影響する。(Jan Nuyts : 1993、p. 961)

(37) Probably John should go to the movies.

(37)では、「当然」を表す「should」を、「強制」を表す「must」に代えると不自然な文ができる。「強制」という義務的モダリティは「見込」という認識的モダリティと両立できないのである。このような認識的モダリティと義務的モダリティの関係を明らかに指示するように、オランダ語の法動詞「kunnen (英語の「can」に相当する)」の使い分け方が、例として説明されている。(Jan Nuyts : 1993、p. 961)

(38) a. Jan kan morgen weg moeten

Jan can tomorrow away must

'John may have to go tomorrow'

b. Jan moet morgen weg kunnen

Jan must tomorrow away can

'John must be able to go tomorrow'

「kunnen」は「moeten ('must')」の前に置かれると、物事がそうなる可能性、すなわち「認識的モダリティ」を表すように用いられると解釈される。これとは対照的に、「kunnen」は「moeten」の後ろに置かれると、動作をする「能力」を表すように用いられると解釈される。つまり、認識的モダリティの方が、義務的モダリティを支配するといえるのではないだろうか。

また、「時」と「頻度」も同じ支配層に属するわけではない。「時」は常に「頻度」を

支配するのである。

- (39) a. Yesterday, John repeatedly called my sister.
b. *Repeatedly, John yesterday called my sister.

上記の考えから、「命題」および「叙述」の階層における修飾成分の支配層順序は次のように書き表される。(Jan Nuyts : 1993, p. 961)

- (40) evid. > epist.mod./polarity > deont.mod. > time > quant. asp.
(証拠性 > 認識的・極性 > 義務的 > 時 > 頻度)

2.2.2 Hengeveld (1992a; 1992b; 1997)

副詞は、述語・文の修飾語として重要な役割を果たしているにもかかわらず、名詞・動詞・形容詞に比べて、言語学研究者から関心をあまり持たれてこなかった。西洋人研究者にとっては、西洋語の副詞はほとんどが派生語のため、副詞のカテゴリーを認めることもなかった。例えば、英語では、言語表現で使われる副詞のほとんどが形容詞から派生したものである。オランダ語においては、形容詞がそのまま述語・文を修飾するように用いられることが多い。それゆえ、標準 FG では、副詞カテゴリーの存在を認めず、「John is remarkably intelligent」における副詞「remarkably」は以下のように規定されている。(Dik (1997a:147))

- (41) (f_i: intelligent (remarkable)Degree) (John)_∅
'John has the property of being intelligent to a remarkable degree)

(41)では、「remarkably」が形容詞語幹「remarkable」の派生とされる。標準FGでは、「名詞」「動詞形」「容詞」3つのカテゴリーしか認めない上で、副詞が形容詞から派生したもので表現上の語形にすぎないと考える傾向が見られる。さらに、程度副詞については「演算子」として扱う先行研究も存在する。(Mackenzie (2000: 123))

- (42) very competent (+f_i : competent)
extremely competent (++f_i : competent)
insufficiently competent (-f_i : competent)

f_i = property/relation (性質・関係)

ただし、Hengeveld (1992a; 1992b)では、「副詞」を第四のカテゴリーとして述語カテゴリーのリストに添えるべきだという考えを述べている。4つの述語カテゴリーの典型支配層については、次のように書き表している。

- (43) Verb > Noun > Adjective > Adverb

(43)の典型支配層によると、ある言語には副詞があると必ず形容詞が存在するとされる。

さらに、Hengeveld (1997)では、「副詞」の(意味的な)定義は次のように与えられている。(Hengeveld (1997: 121))

- (44) An adverb is a lexical modifier of a non-nominal head.
(「副詞」とは、非名詞主要語の語彙的修飾語のことである)

上記の定義は、次のように説明できる。「modifier (修飾語)」とは、非必須の統語的位置を占め、常に主要語に従属するものである。(Hengeveld (1997: 121))

- (45) a. She dances beautifully.
b. She dances.
c. *She beautifully.

(45)では、「beautifully」がいつも自分の主要語「dance」に従属する。

なお、「語彙的 (lexical)」とは、前置詞句などの、統語的に構成された修飾成分を含まないことである。次の例文を比較のこと。(Hengeveld (1997: 121))

- (46) a. She dances beautifully.
b. She dances in a beautiful manner.
(47) a. I spoke to her yesterday.
b. I spoke to her before you arrived.

「副詞」を含んでいるのが(46a)と(47a)である。「beautifully」が形容詞「beautiful」から派生したものだが、実際は、「派生」というのは、新しい語彙項目を製作する述語形成規則であり、「beautifully」など派生副詞も「語彙的」なのである。

「非名詞主要語 (non-nominal head)」とは、名詞主要語を除く、形容詞主要語などの、語彙要素から文全体にかけてのさまざまな主要語のことである。(Hengeveld (1997: 121))

(48) an extremely intelligent boy.

(49) Frankly, I don' t like you.

(48)では、「extremely」が形容詞「intelligent」を修飾する。(49)では、「Frankly」が文全体「I don' t like you」を修飾する。

副詞は、非名詞主要語の語彙的修飾語と定義されることによって、基本構造の各階層に属する「周辺項」の位置を占める語彙要素に描写することができる。それゆえ、副詞の分類も、周辺項の分類と同じように基本構造の階層によって行うことができ、次のように 5 種類に分けられる。

述語周辺項としての副詞 (Adverbs as predicate satellites)

述語周辺項は、述語で表した性質・関係を修飾するものである。述語周辺項の位置を占める副詞は、「程度副詞」と「様態副詞」である。これらの主要語は、「動詞」「形容詞」「副詞」のいずれも可能である。(Hengeveld (1997: 126)

(50) That boy played clumsily.

(51) That boy is extremely clumsy.

(52) That boy played incredibly clumsily.

ただし、様態副詞は、形容詞・副詞の述語と共に使われることができない。

叙述周辺項としての副詞 (Adverbs as predication satellites)

叙述周辺項は、事象の起こる時や場所などについての付加情報を与えるものである。叙述周辺項の位置を占める副詞は、「時の副詞」「場所の副詞」「頻度副詞」である。(Hengeveld (1997: 128)

- (53) The meetings were held recently.
(54) The meetings were held nationally.
(55) The meetings were held frequently.

ただし、時の副詞「recently」は、非過去の文型と共に使われることが不可能である。

(Hengeveld (1997: 128))

- (56) *The meetings will be held recently.

なお、事象の起こる見込みを表す副詞についても、叙述周辺項の位置を占める副詞とすることができる。(Hengeveld (1997: 128))

- (57) One hardly finds a topic that give rise to more confusion.

事象の起こる見込みを表す副詞は、自身が事象の現実性を表す成分のため、他の現実性を表す成分、特に否定文型と共に使われることができない。(Hengeveld (1997: 129))

- (58) *One hardly doesn't finds a topic that give rise to more confusion.

命題周辺項としての副詞 (Adverbs as proposition satellites)

命題周辺項は、命題に対する主観的な態度を表すものである。この「態度」は、「認識的」「証拠的」「態度的」のいずれにも分類できる。(Hengeveld (1997: 129))

- (59) Probably he' s ill.
(60) Apparently he' s ill.
(61) Unfortunately he' s ill.

命題副詞は、「疑問」など、命題の内容に対する話し手の責任を表さない言語行為（疑問など）と共に使われることが不可能である。（Hengeveld (1997: 129)

- (62) *Is he probably ill?

なお、命題の内容が真になると判断するときに使われる観点・限度を表す「観点・範囲の副詞」も、命題周辺項の位置を占める副詞とすることができる。（Hengeveld (1997: 130)

- (63) Architecturally, it is a magnificent conception.
(64) Weatherwise, we are going to have a bad time this winter.

これらの副詞をつけた文は、「文で表す命題が事実より話し手の意見だ」という意義を含んでいるものである。

発話周辺項としての副詞 (Adverbs as illocution satellites)

発話周辺項は、話し手のコミュニケーションのあり方を限定するものである。発話周辺項の位置を占める副詞は、「発話副詞 (illocutionary adverbs)」と呼ばれる。（Hengeveld (1997: 130)

- (65) Frankly, I don' t like him.
(66) Confidentially, I don' t like him.

「Confidentially」など発言副詞は、命令文と共に使われることが不可能である。
(Hengeveld (1997: 130))

- (67) *Confidentially, shut up!

発言周辺項としての副詞 (Adverbs as utterance satellites)

発言周辺項は、話し手が自分の発言を、談話の文脈に位置させるための語彙的方法を描写するものである。発言周辺項の位置を占める副詞の例には、以下のようなものがある。
(Hengeveld (1997: 131))

- (68) Finally, I see no reason to go on like this.
(69) Briefly, I see no reason to go on like this.

(68)では、「Finally」が「この文が最後の議論だ」ということを、(69)では、「Briefly」が「この文が先に述べた議論の要点だ」ということを表している。

なお、ヨーロッパ諸言語の中には、ある種類の副詞がない言語も見つかっている。例として、オランダ語には、述語副詞と叙述副詞及び命題副詞の一部が見つかったが、発話副詞と発言副詞がなく、発話副詞と発言副詞の代わりに、複雑副詞的表現が用いられる。ドイツ語では、形容詞「klug ('wise')」が、そのまま様態副詞として使われることができる。「klug ('wise')」は、語幹に語尾「-weise」をつけると「klugerweise ('wisely')」

になって程度副詞として使われることである。オランダ語にも同様な方法がある。

2.3 本研究のために発展させた理論枠組

2.3.1 「副詞」の定義について

日本語のモダリティ・評価を表す副詞を研究するための理論枠組を発展させる際には、まず、研究の中心となる「日本語副詞」の特徴を理解した上で、形式・機能的な定義を与える必要がある。次に、モダリティ・評価の「分類」、及びモダリティ・評価を表す副詞と他の成分との「支配関係」「成分順序」を研究し、実践研究のための枠組を作り、最後に試験研究によってモダリティを表す副詞の「解釈メカニズム」を作らなければならないと考えられる。

上記のような、西洋語の副詞が、ほぼ形容詞の同形語・派生語にすぎないという研究は、副詞を独立の категория として扱うことを拒否する傾向に導く。しかし、日本語の場合は、副詞が西洋語と同じような派生語でなくて、音・声・様子を写したり（「うろうろ」「ぐうぐう」など）、名詞や動詞を組み合わせたり（「相変わらず」など）、様々な方法で作られたものである。さらに、二字熟語（「絶対」「当然」「勿論」など）や名詞・動詞と助詞の組合せ（「時に」「実は」「飽く迄」など）から発展したものもある。以上の点から、日本語副詞は語彙項目であり、「基本述語」の一つとすることができる。

ただし、述語の category を分類する際には、「形式的基準」「機能的基準」両方の基準で考察しなくてはならない。Mackenzie (2000: 126)によれば、副詞の形式的性質は「不変性 (invariability)」である。「不変性」とは、名詞と同じように格前置詞・格助詞または数・性などを表す語尾を付けず、動詞・形容詞のように時制・人称など語尾も付けないということである。機能的な方面では、副詞は何れかの付加情報を表すために使われる語だから、「周辺項」の役割を果たすものに描写することができる。

結論として、副詞、すなわち、「副詞的述語 (Adverbial predicate)」の機能的な定義を次のように与える。

(70) Adverbial predicate (Ad) is a predicate which is primarily used as the head of a satellite.

(副詞的述語とは、主に周辺項の主要語として用いられる述語のことである)

ここで「副詞」の代わりに「副詞的述語」という用語を使う理由は、「副詞」という語が動詞や文の修飾語だけでなく文の述語として使われることもあるため、副詞の主要な機能「非名詞の修飾語」を強調するべく、「副詞的述語」を使用している。

副詞的述語を第四の基本述語のカテゴリーとして設定した上で、派生副詞を製作するために使われる「副詞化 (Adverbialization)」の述語形成規則を、次のように設定することになる。

(71) Adverbialization

input: pred [A]

output: pred [Ad]

ex. brief -> briefly

hayai -> hayaku

副詞化の述語形成規則は、形容詞を副詞に変えて新たな派生副詞を製作する述語形成規則である。この形成規則は英語にも日本語にも見つかっているが、日本語では言語表現で使われる副詞のほとんどが派生語でなく様々な方法で作られたものである。

2.3.2 「モダリティ」と「主観評価」の分類

次は、モダリティ・主観評価を表す副詞の分類を検討しよう。まず、Jan Nuyts (1993) の修飾成分の支配層順序を考察したい。

- (72) evid. > epist.mod./polarity > deont.mod. > time > quant. asp.
(証拠性 > 認知的・極性 > 義務的 > 時 > 頻度)

なお、「能力」「希望」など「内在的モダリティ (Inherent modality)」は、述語の活用形 (日本語の「可能形」「～たい形」など) や助動詞 (英語の「can」) で表すものであるため、本研究範囲外である。

認知的モダリティについては、「主観」と「客観」すなわち「間主観」の区別こそが、実際には、認知的モダリティ自身の意味よりも、むしろ「証拠性」にかかわることである。同時に、標準FGにおける「客観的モダリティ」と「主観的モダリティ」の区別は「不必要」だといえる。英語の法動詞「may」の例文を考察して説明する。

- (73) He may be reading books.
(74) I may be back to the next year.
(75) There may be hundreds of other case of racial violence.

(73)と(74)は、「動作主が動作をする可能性がある」、すなわち「「may」が客観的モダリティを表す」と解釈されることが当然である。しかし、(75)は、「事象が起こる可能性がある」と解釈されることができが、なぜ「この命題が真になる可能性がある」、すなわち、「「may」が主観的モダリティを表す」と解釈される傾向が強いのであろうか。それは「証拠性」に起因する。例えば、(73)と(74)の場合は、通信状況が「会話」なので、聞き

手が直接に話し手から情報を受けるし、意見の交換をすることができる。このような場面では、話し手だけでなく聞き手も物事の現実性を判断するものである。そして、(73)と(74)で表した情報は「間主観性」が高く、「may」で表した認識的モダリティも「客観的」と判断されるのである。

一方(75)の場合は、通信状況が「報道」であるため、聞き手が遠い情報源から情報を受けしており、意見の交換も一切できない。そういった場面では、物事の現実性を判断することが話し手（報道者）のみの責任なのである。そして、(75)で表した情報は「主観性」が高く、「may」で表した認識的モダリティも「主観的」と判断される。

つまり、「may」は単に認識的モダリティを表すが、表した認識的モダリティが「客観的」か「主観的」かのどちらかを判断することが、実際は、情報の「証拠性」によって異なるものである。「情報の獲得方法が情報の証拠性に影響を及ぼす」という関係は、上記のように説明できる。

では、最初に本研究の対象となるモダリティは、次のように分類できる。

証拠的モダリティ

命題内容の獲得方法によって命題内容の确实さの評価を表すモダリティ

「経験 (Experiential) 」	話し手自身が経験したもの
「推測 (Inferential) 」	証拠で推し量ったもの
「伝聞 (Hearsay)」	人やいずれの情報源から聞いたもの
「主観 (Subjective)」	話し手自身だけの意見・結論

認識的モダリティ

一般的な知識によって物事の現実性判断を表すモダリティ

「確実 (Certain)」	物事がそうなることは確かだ
「可能 (Possible)」	物事がそうなる可能性がある
「見込み (Probable)」	物事がそうなることが期待できる
「不可能 (Impossible)」	物事がそうなる可能性がない

義務的モダリティ

条件・決まりによって事象の価値判断を表すモダリティ

「強制 (Obligatory)」	条件・決まりによってしななければならない
「適切 (Appropriate)」	状況に当てはまる
「許可 (Permissible)」	(目上の立場から) させることができる
「不適切 (Inappropriate)」	状況に当てはまらない
「禁止 (Forbidden)」	(目上の立場から) させることができない

ただし、「日本語副詞で表すモダリティが何のモダリティなのか」という問題は、実践研究の結果で述べることにする。

「主観評価」とは、命題に対する話し手の主観態度のことである。そして、主観評価を表す副詞（例として、「評価の副詞」は「どのように考えるか」という主観態度を表す）である。例えば、「Unfortunately」という評価の副詞は、命題に対して「不幸だ」という主観態度を表すように用いられるものである。それゆえ、「評価の副詞」は「命題」の階層における「命題周辺項」の一つとされている。

「主観評価」には下位分類があるのかについてであるが、標準FGでは、「主体的モダリティ」には「願望 (Volition)」という下位分類がある。「願望 (Volition)」とは、「話し手はその命題が真になって欲しい (it' s speaker' s wish/hope that proposition X_i is/will be realized)」のことである。しかし、本稿では「客体的モダリティ」と「主体

的モダリティ」の区別を認めないので、新たに「願望」を「主観評価」の下位分類とする。

ここで「願望」を「主観評価」の下位分類に描写する理由は、人間が「これが欲しい」「そうになって欲しい」と思う前には、必ず「これがよいもの」「そんなことが好ましい」と評価する。言い換えれば、「願望」は「主観評価」の一つなのである。ただし、「願望」を表す副詞は、将来のことを表す文と共起することが多い。例えば、

(76) Hopefully, you will succeed.

(76)では、「願望」を表す副詞「Hopefully」が「将来時制」を表す助動詞「will」と共起している。

それとは対照的に、大部分の評価の副詞は、将来のことを表す文に共起することが多い。

(77) Wisely, John didn' t answer the question.

(78) Fortunately, we found him immediately.

2.3.3 「モダリティ・主観評価を表す副詞」と「成分順序」

では、モダリティ・主観評価を表す副詞の成分順序を検討しよう。通常は、言語表現では、成分特に各階層の周辺項が文の中心、すなわち文の「述語」の相対的な距離によって置かれることになる。そして、「様態」「道具」など心叙述の階層に属する周辺項の方が「(事象が起こる)場所」「時」「頻度」など拡大叙述に属する周辺項より文の述語の近くに置かれることになる。例えば、

(82)は、次のように説明できる。「様態」「道具」など「レベル1 周辺項」が文の中心(H)、すなわち文の述語の一番近くに置かれる。「時」「場所」「頻度」など「レベル2 周辺項」は、レベル1 周辺項より文の述語から離れて置かれる。「態度周辺項」と「発話周辺項」は特別位置(P1)、すなわち文頭の位置に置かれる。(78)の成分順序パターンは、各階層の周辺項と述語の結合性、及び周辺項同士の領域関係を反映したもので、「アイコン的な順序」に関わるものである。

ただし、(82)の成分順序パターンは概略にすぎない。レベル2 周辺項同士の「時」「場所」「頻度」の中でも領域関係、つまり「支配関係」が見つかる。Jan Nuyts(1993)によれば、「時」はいつも「頻度」を支配するものである。

- (39[˘]) a. Yesterday, John repeatedly called my sister.
b. *Repeatedly, John yesterday called my sister.

(39a[˘])では、特別な語用機能を顕示させるように、「時」を表す「Yesterday」が特別位置(文頭)に置かれている。一方、「頻度」を表す「repeatedly」の方は、文の述語「call」の近くに置かれている。このような成分順序は「アイコン的」である。常識で考えると、事象が起こることが「時」つまり「時間的な領域」に存在するので、その事象が何度も起こることも「時間的な領域」に存在するものである。そして、「事象の起こる回数」つまり「頻度」が「時」の領域に存在する、すなわち「時」に「支配」されることは自然である。その「支配関係」をアイコン的に示すように、「Yesterday」が必ず「repeatedly」より文の述語から離れて置かれたのである。

Jan Nuyts(1993)の修飾成分の支配層順序に基づいて、モダリティを表す成分と「時」「頻度」を表す成分の支配関係は、次のように書き表すことができる。

(83) 証拠的 > 認識的 > 義務的 > 時 > 頻度

(83)は、次のように説明できる。「証拠的モダリティ」が「認識的モダリティ」を支配するということは、「文の認識的モダリティが「主観的」とか「間主観的」とか解釈されるのは、(文で表した)情報の獲得方法、つまり「証拠性」に起因するということを意味する。そうした文の証拠性の判断には、二つの方法がある。一つは、通信状況からの解釈である。二つ目は、証拠的モダリティの成分からの解釈である。例えば、

(84) In my opinion, he might be a good choice for Tien...

www.dbzsc.com/?dbzsc=live_action

(84)では、「主観」を表す「In my opinion」が文の認識的モダリティ「可能」を支配している。「In my opinion」は、「主文で表した認識的モダリティは主観性が高い」と暗示して、「やや低い可能性」を表す「might」の共起を制限している。

「認識的モダリティ」が「義務的モダリティ」を支配するとは、「認識的モダリティが義務的モダリティの共起を制限する」ということである。例えば、認識的モダリティ「見込」は、「強制」より「適切」の義務的モダリティと共起しやすいということである。(Jan Nuyts : 1993、p. 961)

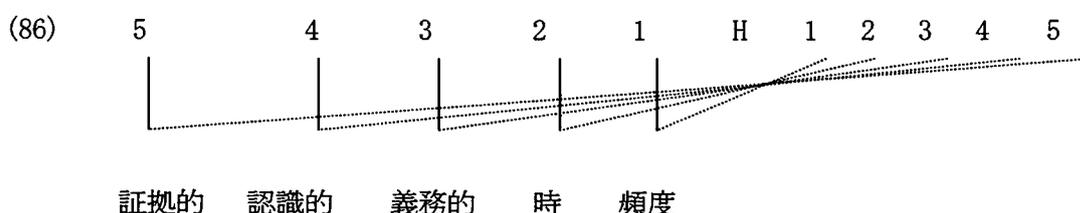
(37´) Probably John should go to the movies.

「強制」の方は、認識的モダリティ「確実」に支配される傾向が強い。

(85) Certainly, we must lobby politicians to make sure that...

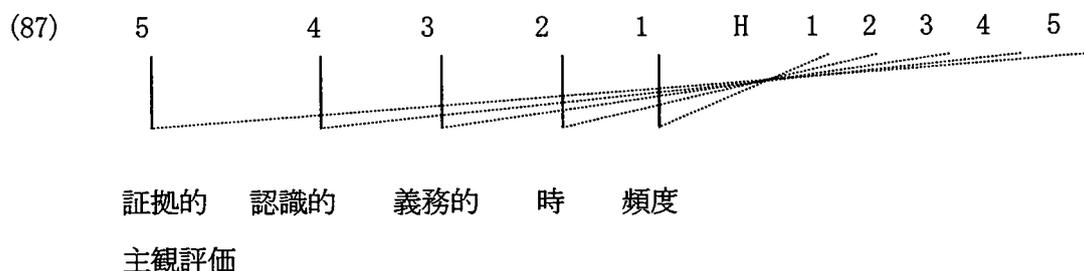
www.earthdive.com/front_end/news/newsdetail.asp?id=1160

(82)の支配関係は、一方から考えると、モダリティを表す成分と「時」「頻度」を表す成分の「領域関係」ともいえる。そしてその領域関係が階層状になっており、次のように「求心的」な成分順序パターンを書き表すことができる。

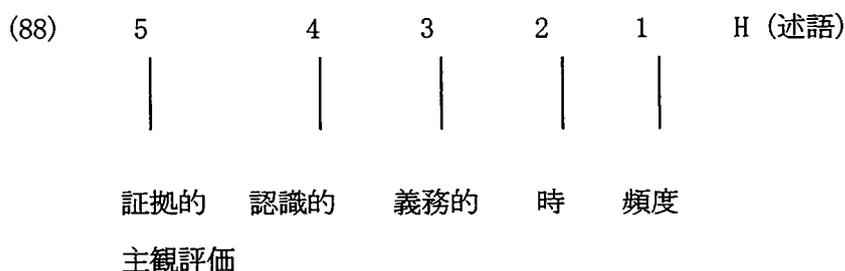


ただし、副詞の成分の場合は、モダリティ特に証拠的モダリティ・認識的モダリティを表す副詞が文頭または文の中心（述語）の「前方」に置かれることが多い。文頭または文の中心（述語）の「前方」に置かれるのは、「アイコン的順序の原則」から、次のように説明できる。言語表現で表した情報の正確さを判断する際には、まずその情報の獲得方法、つまり「証拠的モダリティ」が明らかになることが必要である。次に、「確かのか?」「可能かどうか?」など物事の現実性に対する問題を解決する。そして、文の「認識的モダリティ」が判明すると、文で表した情報の正確さを判断する過程に入る。その判断順序がアイコン的に示されるように、証拠的モダリティ・認識的モダリティを表す副詞は、必ず文頭または文の中心（述語）の「前方」に置かれる。

では、「主観評価」と他の成分の支配関係を検討しよう。「主観評価」とは、命題に対する話し手の個人的な「好し悪し」の判断のことである。そして、「主観評価」を表す副詞が「証拠的モダリティ」を表す副詞と同じように「態度周辺項」となって、言語表現で同じ位置に置かれるものである。「主観評価」の副詞を(86)の成分順序パターンに添えると、次のような成分順序パターンができる。



なお、日本語の場合は、文の構造が完全に「主語 - 客語 - 述語」のパターンになるので、文の述語と文全体の修飾語が全て述語の「前方」に置かれるものである。そして、「日本語向け」の修飾成分の順序パターンは次のように書き表される。



(84)の修飾成分の順序パターンは、実践研究における「副詞の分類テスト」のためにデザインされたものである。詳細は、第3章「モダリティ・主観評価を表す日本語副詞の実践研究」に参照されたい。

2.3.4 「モダリティ・主観評価を表す副詞」の試験研究

最後に、試験研究によってモダリティ・評価を表す副詞の「解釈メカニズム」を作ることについて述べたい。日本語副詞は、完全にモダリティを表す役割を担うよりも、むしろ文型と呼応するように用いられるものであるため、一つの副詞が色々な意味を表すように

用いられる場合が存在する(後述)。そして、モダリティ・評価を表す副詞の使い分け方を理解するためには、その副詞の「解釈メカニズム」を研究することが必要である。この試験研究を行う際には、日本語副詞「必ず」を対象にして研究を行った。

日本語副詞「必ず」は、認識的モダリティ「確実」か、義務的モダリティ「強制」など、いずれかのモダリティを表すために用いられるかによって、文型や述語が異なる。言い換えれば、「必ず」の意味は「絶対的」というよりはむしろ「相対的」なのである。この例として以下のような文をあげることができる。

(89) 12Mbps に乗り換えると必ず速くなる？ (認識的、確実)

(arena.nikkeibp.co.jp/tec/bb/20021217/103169/ 2004年10月1日)

(90) リンク削除の申し入れをした場合は必ず従ってください。 (義務的、強制)

(www.semicon.toshiba.co.jp/readme/ 2004年10月1日)

(91) 必ず検討する必要があります。 (義務的、強制)

(www.gs.com/japan/ewarrant/pocketkabu/risk/ 2004年10月1日)

まず、(89)の文構造と述語を検討しよう。(89)では、通信状況が「質問」なので「疑問的」な発話内効力を表すと解釈することができる。(89)の述語も「過程」を表す「速くなる」なのである。このような「過程」とは、参加者の支配力より条件・力・要因によって動かす物事の変化のことである。(89)の述語が「過程」を表すものだから、(89)の「必ず」は「確実」を表すものと解釈される。

次は、(90)と(91)を検討しよう。(90)では、依頼文型「～てください」が「聞き手に動作をさせてもらう」ために用いられたものなので、「命令的」な発話内効力を表すものと解釈することができる。(90)の述語も「動作」を表す「従う」という動詞である。こうした「動作」とは、参加者が自分の思うとおりに行う事象のことである。よって、(90)の述

語が「動作」を表すものなので、(90)の「必ず」は「強制」を表すものと解釈される。(91)では、「必ず検討する」全体が主要語「必要」を限定する。「検討する」も「動作」を表すものだから、(91)の「必ず」も「強制」を表すものと解釈される。

上記の分析によって、最初は「必ず」の解釈メカニズムは次のように書き表される。

事象タイプが「+con」（動作または定置）になったら、「確実」と解釈
事象タイプが「-con」（過程または状態）になったら、「強制」と解釈

しかし、モダリティ・評価を表す副詞の「解釈メカニズム」を研究する際には、まず文の「通信状況・発話内効力」から始めなければならない。以下に英語の「must」の例を考察する。

(92) Candidates must satisfy the general conditions for admission.

通信状況 : 告知
文型 : 断定文型
発話内効力 : 命令的
述語 : 「satisfy」
事象タイプ : 動作

∴表すモダリティ : 「強制」

(92)は、文型が「断定文型」であり、通信状況が「告知」なので「命令的」な発話内効力をもっているものと判定される。「命令的」な発話内効力の領域に存在する述語は、必ず

「動作」または「定置」を表すものになる。それゆえ、「must」で表すモダリティが「強制」と解釈されるのである。

(93) You must be honest about your thoughts, feelings, habits, likes, dislikes, personal history, daily activities and plans for the future.

通信状況 : 忠告
文型 : 断定文型
発話内効力 : 命令的
述語 : 「be honest」
事象タイプ : 動作

∴表すモダリティ : 「強制」

(93)は、文型が「断定文型」であり、通信状況が「忠告」なので「命令的」な発話内効力をもっているものと判断される。「命令的」な発話内効力は、「+con」の事象タイプ（動作または定置）と共起しなければならないので、文の述語「be honest」が状態「正直だ」より動作「正直に考える」を表すと解釈される。その結果、「must」で表すモダリティが「強制」と解釈されるのである。(93)は、「通信状況が発話内効力を支配して、発話内効力が述語の表す事象タイプを支配する」ということの証拠となる。

もう一つの例文をとりあげる。

(94) Reggae must be the only music that's got its own country - Jamaica.

通信状況 : 報道
文型 : 断定文型

発話内効力 : 平叙的

述語 : 「be the only music that's got its own country」

事象タイプ : 状態

∴表すモダリティ : 「確実」

(94)は、通信状況が「報道」なので、証拠性が「主観的」か「間主観的」かのどちらかに判断できる。上記のように、ある認識的モダリティが「主観的」か「間主観的」かのどちらかを判断することは、認識的モダリティの内在的な意味よりも、文の「証拠性」に関わり、「主観的」と「間主観的」の区切りを示すのが困難なため、個人的な判断によって決定されるものである。そのため、「must」で表した認識的モダリティ「確実」が「主観的」か「間主観的」かのどちらかを判断することは、個人的な判断によって異なる。

では、最後に例文をもう一つとりあげる。

(95) I' m sure he must feel he has lost a close family friend.

通信状況 : 主張

文型 : 断定文型

発話内効力 : 平叙的

述語 : 「feel」

事象タイプ : 過程 (感情)

∴表すモダリティ : 「確実」

(95)では、認知形容詞「sure」が「話し手が自分の意見を言い張る」、つまり「主張する」

ために、述語として使われるものである。そして、(95)の通信状況が「主張」と解釈されるため、「must」で表した認識的モダリティ「確実」は、「主観的」と判断される傾向が強い。

上記の例から見ると、英語の「must」の解釈メカニズムが驚くほど日本語の「必ず」との事象タイプと共通していることがわかる。英語の「must」は、日本語の「必ず」と同じように、「-con」（過程または状態）を表すと共起すると、常に認識的モダリティ「確実」を表すと解釈されるが、「+con」の事象タイプ（動作または定置）と共起すると、義務的モダリティ「強制」を表すと解釈される。

以上のテストの結果から、モダリティ副詞の解釈メカニズムの図形を、次のように書き表した。

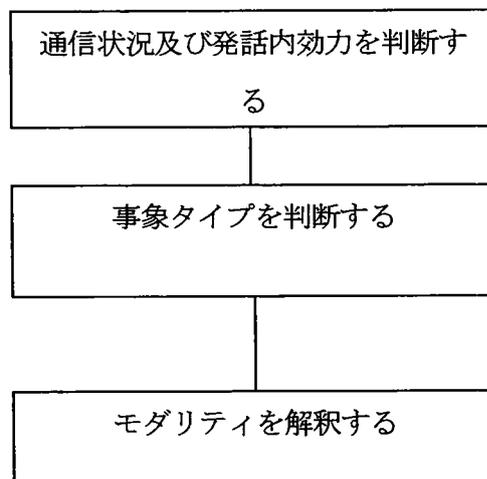


図2. モダリティを表す副詞の解釈メカニズム

第3章

モダリティ・主観評価を表す日本語副詞の実践研究

3.0 はじめに

第3章では、モダリティ・主観評価を表す日本語副詞の実践研究を説明することにする。3.1では、本稿のために発展させた枠組をまとめ、さらに説明を加える。3.2では、実践研究の過程を、3.3では、モダリティ・主観評価を表す日本語副詞の実践研究を詳細に説明する。

3.1 実践研究の準備

3.1.1 「副詞」の機能的な定義

本稿では、Hengeveld (1997)における「副詞」の定義を基にし、「副詞」の機能的な定義を発展させた。Hengeveld (1997)における「副詞」の定義は、下記のようなになる。(Hengeveld (1997: 121))

(1) An adverb is a lexical modifier of a non-nominal head.

(「副詞」とは、非名詞主要語の語彙的修飾語のことである)

ただし、「副詞」という語が動詞や文の修飾語だけでなく、文の述語として使われる場合も存在するので、「非名詞の修飾語」の機能を強調するべく「副詞」よりも、「副詞的述語」という表現を使うことになる。そして、「副詞」だけでなく「副詞的述語」にも機能的な定義を与えることが必要である。本稿では、「副詞的述語」を、以下のように機能的に定義付けることにする。

(2) Adverbial predicate (Ad) is a predicate which is primarily used as the head of a satellite.

(副詞的述語とは、主に周辺項の主要語として用いられる述語のことである)

(2)の定義は、次のように説明できる。「述語」というのは、性質・関係を示す成分のことである。そして、「周辺項の主要語として用いられる述語」とは、周辺項の位置に置かれる同時に他の修飾語を付加されることが可能であるということである。以下に例文を示す。

(3) That boy played incredibly clumsily.

(3)は、次のように基本構造に書き表される。

(3´) That boy played incredibly clumsily.

[Past e: [(play [V]) (that boy)Ag (clumsily (incredibly)Degree)Manner]]

では、(3)の「様態」を表す成分「incredibly clumsily」を検討しよう。「incredibly clumsily」全体が「様態」、すなわち「play」で表した動作のありさまを表す成分なので、基本構造における「レベル1周辺項」の一つとする。ただし、「incredibly clumsily」は、主要語の様態副詞「clumsily」と修飾語の程度副詞「incredibly」から構成されたものである。「incredibly」が「clumsily」という様態の程度を示すために付加されたものだから、「clumsily」が周辺項の位置に置かれる同時に、修飾語「incredibly」を付加されることも可能である。そして、修飾語の程度副詞「incredibly」を削除しても、主要語の様態副詞「clumsily」全体は、「様態」を表す成分として用いることができる。

(4) That boy played clumsily.

程度副詞は、様態副詞の修飾語だけでなく、形容詞の述語で表した性質・関係の程度を示すために用いることができる。その場合に用いられた程度副詞は、「レベル1周辺項」の位置を占めると描写することができる。

(5) That boy is extremely clumsy.

[Pres e: [(clumsy [A]) (that boy)Ag (extremely)Degree]]

本研究では、文の修飾語として副詞を対象とすることにし、文の述語や修飾節の主要語、名詞の修飾語などに使われる場合は、研究範囲外とする。

3.1.2 「モダリティ・主観評価」の分類

本稿では、前章において「モダリティ」を「証拠的モダリティ」「認識的モダリティ」「義務的モダリティ」三種類に分類した。この三種類のモダリティに属する下位類および下位類の定義は、次のように再掲する。

証拠的モダリティ

命題内容の獲得方法によって命題内容の確実さの評価を表すモダリティ

「経験 (Experiential) 」 話し手自身が経験したもの

「推測 (Inferential) 」 証拠で推し量ったもの

「伝聞 (Hearsay)」	人やいずれの情報源から聞いたもの
「主観 (Subjective)」	話し手自身だけの意見・結論

認識的モダリティ

一般的な知識によって物事の現実性判断を表すモダリティ

「確実 (Certain)」	物事がそうなることは確かだ
「可能 (Possible)」	物事がそうなる可能性がある
「見込み (Probable)」	物事がそうなることが期待できる
「不可能 (Impossible)」	物事がそうなる可能性がない

義務的モダリティ

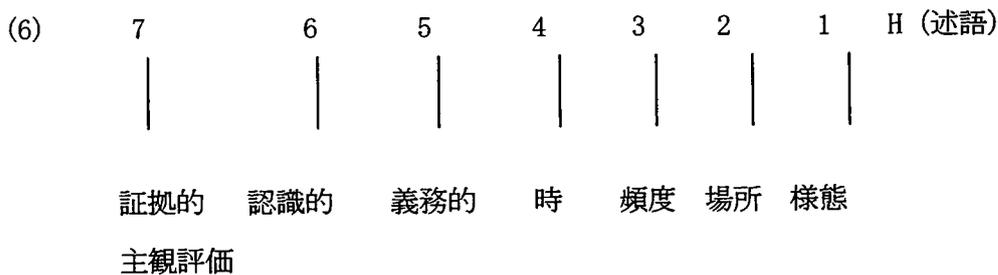
条件・決まりによって事象の価値判断を表すモダリティ

「強制 (Obligatory)」	条件・決まりによってしなけければならない
「適切 (Appropriate)」	状況に当てはまる
「許可 (Permissible)」	(目上の立場から) させることができる
「不適切 (Inappropriate)」	状況に当てはまらない
「禁止 (Forbidden)」	(目上の立場から) させることができない

主観評価は、普通の主観評価と「願望」の下位類に分類される。しかし、「願望」というものは、「評価」よりも、むしろ「評価から派生した主観態度」であり、ただ主観評価の下位類より主観評価の「派生物」とする方が適切である。

3.1.3 日本語副詞と成分順序

「副詞の分類テスト」の基準を発展させるために、日本語における修飾成分の順序パターンを、本論文では次のように発展させる。



「副詞の分類テスト」とは、成分順序、すなわちある副詞と他の修飾成分の領域関係によって、その副詞のタイプを判断する方法のことである。一般的に、「様態」「継続性」「道具・手段」など述語に近い階層に属する周辺項（レベル1周辺項）が、「時」「場所」「理由」「主観態度」など遠い階層に属する周辺項（レベル1周辺項および態度周辺項）述語の近くに置かれる傾向がある。そして、(6)の順序パターンは、文の基本構造における修飾成分の間の領域関係を、アイコン的に示すものといえる。

(7) まずは土曜日に（時）学校で（場所）一緒に（様態）スポーツをして。

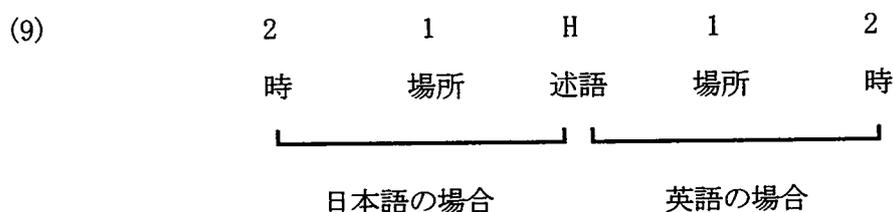
www.ewoman.co.jp/winwin/53hk/21.html

(7)では、修飾成分の順序が上記のパターン「時 → 場所 → 様態」に従っている。このような成分順序は、「時 → 事象が起こる場所 → 事象の様態」の領域関係を反映するものである。この「時」「場所」を表す成分が両方「拡大叙述」の階層に属する「レベル2周辺項」になっても、実は「時」と「場所」の間には「時 → 場所」の領域関係があるわけである。上記のような「時 → 場所」の領域関係をアイコン的に示す成分順序は英語にも見つかる。

(8) Peter: "I worked in the garden (場所) yesterday(時)."

www.englisch-hilfen.de/en/grammar/reported.htm

日本語とは対照的に、英語の文構造は「主語 - 述語 - 客語」なので、述語と成分の相対的な位置は、日本語と「鏡像」のように反対になる。この現象は、(GP3) 「求心定位の原則」で次のように説明できる。



従って、言語の文構造タイプにかかわらず、「時 → 場所」の領域関係をアイコン的な成分順序で示すことは、普遍性のある現象といえる。

では、(6)の順序パターンで副詞の分類をテストする一例をあげよう。

(10) 4年たった今頃も(時) きっと (認識的モダリティ) イギリスのどこかで
(場所) あいかわらず汚いペンキだらけの半ズボンで (様態) バーに入り浸り黒
ビールを飲んでいることだろう。

tear.maxs.jp/pic314.html

(10)では、「時」を表す「4年たった今頃も」が、特別な語用機能「焦点」をつけたものなので、特別な位置「文頭」に置かれ、助詞「も」を付加されたものである。言い換えれ

ば、「4年たった今頃も」の成分順序は、通常の「アイコン的」な順序を無視して(GP7)「語用顕示の原則」に従うことを選択したものである。ただし、「きっと」が「認識的モダリティ」を表す副詞として他の修飾成分を支配することは、自身の成分位置から観察できる。語用機能の顕示した「4年たった今頃も」を除く、(8)における修飾成分の順序は、「認識的モダリティ → 場所 → 様態」のアイコン的な順序パターンに従っていると見える。

日本語は、「あいかわらず」「なんとなく」など、「態度的な意味を含んでいる」と解釈することができる副詞が多い。これらの副詞は意味の基準だけで分類を判断することが難しいが、成分順序の基準と合わせて分析することで容易になる。例えば、

- (11) 指導を終えて、茶の間に行くと、ケージの中で (場所) あいかわらず (様態) 暴れるバグ。

nonkokko.blog.ocn.ne.jp/le_ciel/cat1053960/

意味の方面だけ見れば、「あいかわらず」が話し手の主観態度や、物事の変化しない様子として解釈することができるため、表した意味機能を判断することも難しい。

ただし、(11)では、「あいかわらず」が(事象が起こる)場所を表す成分よりも述語の近くに置かれるので、主観態度より事象のありさま、つまり「様態」を表すように用いられたものだと判断することができる。

(11)の「あいかわらず」の場合と同じように、「なんとなく」もこの成分順序パターンで分類テストをすることができる。

- (12) この9年で (時)なんとなく (様態) 頭がボケてしまった ...

blog.drecom.jp/ms_jules/

- (13) 何のことだか解らなかつたのだが、辞書に似たような言い回しの言葉を列挙させているうちに (時) なんとなく (様態) 解ってきた。

nakano.no-ip.org/lege/Apr97.html

3.1.4 日本語副詞のモダリティ解釈メカニズム

日本語副詞の特徴の一つは、自分の意味で意味機能を表すよりも、むしろ文型と呼応して意味機能を表すために用いられる傾向があることである。言い換えれば、一つの日本語副詞の意味機能は、文型によって異なるのである。従って、モダリティを表す日本語副詞を研究する際には、その副詞の解釈メカニズムを分析することが必要である。

モダリティ副詞の解釈メカニズムの図形は、次のように書き表される。

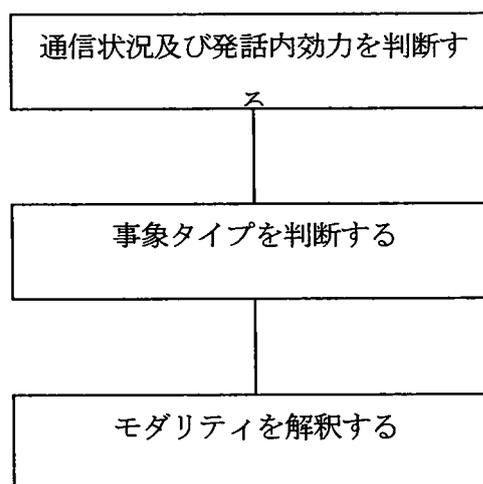


図2. モダリティを表す副詞の解釈メカニズム

モダリティの解釈メカニズムは、通信状況及び発話内効力の判断から始まる。通信状況を、文型や述語の意味と合わせて事象タイプを判断した後、モダリティを解釈する。このメカニズムは、普遍性の程度が高く、表し方・言語タイプに関係なく、モダリティを表す成分を分析するために応用することができる。以下に英語の「must」の例を考察する。

(14) Candidates must satisfy the general conditions for admission.

通信状況 : 告知
文型 : 断定文型
発話内効力 : 命令的
述語 : 「satisfy」
事象タイプ : 動作

∴表すモダリティ : 「強制」

まず、通信状況によって、(14)の文が情報を「告知」するために使われると解釈された後、(14)の文が断定文型でも、文の発話内効力が「平叙的」より「命令的」と判断される。

「命令的」な発話内効力は、原則として、必ず「動作・定置」を表す述語（大部分が動詞）と一緒に現れる。(14)では、文の述語が動作を表す動詞「satisfy」なので、文の事象タイプが「動作」と判断される。従って、(14)における「must」は「決まりなので、しなければならぬ」、つまり義務的モダリティ「強制」を表すと解釈されるのである。

(15) Reggae must be the only music that' s got its own country - Jamaica.

通信状況 : 報道
文型 : 断定文型
発話内効力 : 平叙的
述語 : 「be the only music that' s got its own country」

事象タイプ : 状態

∴表すモダリティ : 「確実」

(15)は、通信状況が「報道」である。そして、(15)の発話内効力は「平叙的」と判断される。(15)は、述語が「性質」を現す「be the only music that's got its own country」ため、「状態」の事象タイプを表すと判断される。従って、(15)における「must」は、「強制」より「述べた事象が確かにそうなる」、つまり認識的モダリティ「確実」を表すと解釈されるのである。

(16) All accounting and financial record keeping and reporting of information must be honest, accurate, timely, and complete.

通信状況 : 告知

文型 : 断定文型

発話内効力 : 命令的

述語 : 「be honest, accurate, timely, and. complete」

事象タイプ : 動作

∴表すモダリティ : 「強制」

(16)の場合は、通信状況が「告知」なので、発話内効力が「平叙的」より「命令的」と判断される。「命令的」な発話内効力は、原則として、必ず「動作・定置」を表す述語と一緒に現れる。そして、(16)の述語が「honest, accurate, timely, and. complete」という「性質」よりも、「be done in honest, accurate, timely, and. complete way」という「動作」を表すと解釈される。従って、(6)における「must」が「強制」を表すと判断されるのである。

(16)の例から見ると、「通信状況が発話内効力を支配して、発話内効力が事象タイプを支配する」という支配関係がよく分かる。英語の法動詞「must」の解釈メカニズムは、次のように書き表される。

(17) 「must」の解釈メカニズム

事象タイプが「動作」になると、「強制」を表すと解釈する

事象タイプが「状態」になると、「確実」を表すと解釈する

3.2 実践研究の過程

3.2.1 研究対象の選択

研究対象の選択は、まず飛田良文・浅田秀子（2003）の「現代副詞用法辞典」から日本語副詞をア行からワ行まで一つずつ調べ、研究範囲内の副詞を選択した。研究範囲内の副詞を判断する基準は、まず「その語が副詞かどうか」を判断し、次に「その副詞がモダリティ・主観評価を表すものかどうか」を判断するという二つの段階に分けられる。

「その語が副詞かどうか」という判断では、一番難しい問題は、その語が「副詞」か「連語」かのどちらかを判定することである。このような判定は、辞典の編集者によって異なるので、本研究でも、あらためて行う必要がある。例えば、

(18) 目標は入賞だがあわよくばメダルをねらっている。

(19) (競馬で)損を取り返してあわよくばもうけたい。

(飛田良文・浅田秀子（2003）「現代副詞用法辞典」)

表面的には、「あわよくば」が話し手の希望・願望を表すと判断することができる。しかし、語源から見ると、「あわよくば」の「あわ」が「あわい」、つまり、「あい（間）」からきたものである。そして、「あわよくば」は、「間が良ければ」つまり「都合が良ければ」という意味を表す「条件節」の機能に使われる「連語」だと判断される。さらに、(18)と(19)では、話し手の希望・願望を表す形式が「あわよくば」でなく、それぞれ述語「ねらう」と話し手（参加者として）の希望を表す「～たい形」なのである。

本稿では、ある語が副詞かどうか判断することにあたっては、語形的基準（副詞は名詞と同じように数・性などを表す語尾を付加せず、動詞・形容詞のように時制など語尾も付けないもの）と、機能的基準（副詞は、基本的には、動詞・形容詞など名詞以外の成分または文全体を修飾するもの）両方の基準を合わせて判断する。また、「単語」か「連語」課の異なりは、分における機能に影響をあたえない。日本語の副詞の中には「おりあしく」「おりよく」など、連語と同じように二つの単語から作り出されたものがあるため、語形的基準だけで「副詞」と「連語」を区別することは困難である。しかし、機能的基準と合わせて分析すれば、「おりあしく」「おりよく」が話し手の気持ちを暗示するために用いられる形式なので、主観評価を表す副詞だと判断することができる。このように、副詞かどうか判断することは、語形だけでなく文における意味上の機能も考察しなければならない。（3.3「モダリティ・主観評価を表す日本語副詞の分析結果」を参照のこと）

次に、「その副詞がモダリティ・主観評価を表すものかどうか」という問題は、その副詞の意味と、他の修飾成分との相対的な位置をあわせて判断する。例えば、

(20) 手口から見ると、犯人はいよいよ奴に間違いない。

(21) この手柄で次期部長はいよいよ疑いないところだ。

（飛田良文・浅田秀子（2003）「現代副詞用法辞典」）

「いよいよ」という副詞は、程度や、近い将来のアスペクトを表すべく使われる場合が多いが、(20)と(21)では、「いよいよ」が「このことがそうになるのが確かだ」と表すもの

のようである。飛田良文・浅田秀子（2003）によれば、(20) と(21)と同じように使われた「いよいよ」が「判断がある一点に落ち着く様子を表す」ということである。しかし、このような解釈は、実際は、「間違いない」「疑いない」という述語から来たのである。言い換えれば、「このことがそうなるのが確かだ」という「話し手の判断」を表すものは「いよいよ」ではなく、文の述語「間違いない」「疑いない」なのである。従って、(20) と(21)と同じように使われた「いよいよ」は、「間違いない」「疑いない」で表す「このことがそうなるのが確かだ」という判断の、「程度」を表すために用いられるものだと判断することができる。こうした(20)と(21)の「いよいよ」は「程度」を表すものであるため、研究範囲外とした。

なお、成分順序から見ると、(20)と(21)の「いよいよ」が述語の直前に置かれることは、「いよいよ」が、程度や様態を表す成分と同じ階層に属すると暗示するものである。程度・様態の副詞は、述語の直前に置かれることが多いのである。

3.2.2 データの収集

研究対象の日本語副詞を選択した後、次にインターネット上の検索エンジン「Google」を使って対象の副詞の「例文」を検索して収集した。データの収集する基準は、「非名詞修飾語として使われた副詞」というものである。従って、名詞や形容動詞と同じように「な」「に」「の」を付けられたものは、研究範囲外とした。述語や主要語として用いられた場合も研究範囲外である。例えば、

- | | | |
|------|----------------------------------|-----------|
| (22) | 彼女はさんざん迷った <u>あげく</u> 安物を選んだ。 | (修飾節の主要語) |
| (23) | デートをすっぱかされたら怒るのは <u>あたりまえ</u> だ。 | (述語) |
| (24) | この作文には <u>いくつか</u> の文法的なミスがある。 | (名詞の修飾語) |

上記の「あげく」「あたりまえ」「いくつか」の用法は研究範囲外とする。

3.2.3 対象の副詞の分析

検索エンジンによって収集した「例文」は、対象の副詞の意味および相対的な位置を分析するためのデータとして使用した。詳細は、3.3に参照のこと。

3.3 モダリティ・主観評価を表す日本語副詞の分析結果

では、検索エンジンによって収集したデータの分析結果を詳細に説明することにする。本節では、対象の副詞を五十音順に並べて分析の結果（分類・特徴および解釈メカニズム）を説明する。

あいにく（生憎）[主観評価]

(25) あいにく毎日雨でしょんぼり。

www.hatena.ne.jp/1076937390

(26) 今日は生憎雪降ってました。

konomu.bblog.jp/entry/152685/

「あいにく」は、「都合が悪くいやだ」という意味を含んでいる。話し手の主観評価を表すために、文の修飾語として用いられる場合が多い。評価の副詞は、話し手の主観態度を表すものであるため、「命題」の階層に属する周辺項とされる。そして、(25)では「あいにく」が頻度を表す「毎日」よりも、文の述語「しょんぼり」から離れて置かれている。

ただし、(26)では、修飾成分の順序は「語用顕示の原則」によって決定されたものである。時を表す「今日」は、特別な語用機能「話題 (Topic)」を付加されたので、特別な位置「文頭」に置かれ、助詞「は」を付加されたのである。「語用顕示の原則」は「アイコン的な

順序の原則」よりも、優先されることが多い。(26)の例文はその現象の一例といえる。

あたら (可惜) [主観評価]

(27) せっかくの味わいを、あたら半減して混乱させられたことは事実。

www2.tky.3web.ne.jp/~ukaihiro/opinion%20only.htm

「あたら(可惜)」の漢字から見ると、「惜」が「惜しい」という意味を表すものといえる。「あたら(可惜)」は「立派なものが相応に扱われていないのを惜しむ」という主観態度を表すために用いられるものなので、「主観評価」を表す副詞とされる。この副詞は文章語で、会話で使用する例は見られなかった。

いきおい [認識的モダリティ 确实] [共起制限 「+dyn」の事象タイプ]

(28) いきおい、ドラえもんの話ばかりになってしまってますが…

plaza.rakuten.co.jp/shinfish/diary/200503140000/

(29)… 約40%引きだから、重い辞書を持ち歩く学生もいきおいこの電子辞書を買う。

tky24.exblog.jp/i11

副詞「いきおい」は、名詞「勢い」の「はずみ、なりゆき」という意味から転じたもので、「はずみで、なりゆきで」「物事の進行や運動の力によって当然」と表すために用いられるものになっている。この「物事の進行や運動の力によって当然」という意味から見ると、「いきおい」は「+dyn」、つまり「動き」のある事象タイプ(動作・過程)を表す述語と共起することになる。言い換えれば、副詞「いきおい」は、動作・過程を表す述語と共起しなくてはならないのである。

尚、認識的モダリティを表す副詞は、モダリティの主観性を強調するべく、文頭に置かれ、読点で副詞と主節の切れ目を示すことが多い。(28)の例文は一例である。

えてして (得てして) [認識的モダリティ 見込]

(30)... そういう人はえてして、何かするといつも失敗するんだよなあ、とか思っていますから、...

homepage1.nifty.com/~watawata/psycho/p4.htm

(31)... 助け船というのはえてしてすぐ沈んでしまうものだが、このときの船は丈夫なように思えた。

www.wrightstaff.co.jp/essay/essay01.html

(32)... 勿論これ自体は、否定するつもりはありませんが、得てして、知識の浅いメーカーや業者は、専門用語をまくしたて、その場に居る人たちを圧倒してしまいます。

www.ss.iij4u.or.jp/~anan/friend.html

「得てして」は、常識で判断した「ある傾向になりがちである」という意味から転じて、「そうなる見込のある」と表すために用いられる。(31)と同じように、「傾向がある」という判断を表す「～ものだ」に呼応することが多い。

おそらく (恐らく) [認識的モダリティ 可能]

(33) おそらく毎日更新は無理なので、あらかじめタイトルで宣言。

kny.yhc.jp/pukiwiki.php

(34) おそらく問題ないとおもいます。

www.big.or.jp/~talk/t-club/soft/best01/bbs.cgi?md=fd&parent=822 - 2005年5月25日

「おそらく」は、「話し手の予想・推量によって、事象が起こる可能性が高い」という意味を表す。意味から見れば、「おそらく」で表す「可能性」は、話し手自身の予想・推量から由来したものである。言い換えれば、「おそらく」で表す認識的モダリティは「主観性」が高いものである。ただし、上記の如く、「認識的モダリティ」と「主観性」すなわち「証拠性」は別の根拠のものであるため、本稿では「主体的モダリティ」「客体的モダリティ」という区別は特にしない。

尚、副詞でモダリティを表すことの特徴は、副詞が語彙項目 (Lexical Items) なので、単にモダリティだけでなく、話し手の主観態度やモダリティの証拠性も一緒に表すことができることがあげられる。副詞に比べて、文型でモダリティを表すことは、文法的に「モダリティ」だけを表すことだと考えられる。

おもいなしか (思いなしか) [証拠的モダリティ 主観]

(35)... おもいなしか地蔵も楽しそうである。

ensou-dakudaku.net/teirei/comic.html

(36)... おもいなしか、ユーミンの腕の振りが大きくなった。

www.limited.co.jp/yankees/novel/ken.html

(37)... おもいなしか、その娘が旦準洋行に通勤する娘に似ているように思われた。

www.geocities.co.jp/HeartLand-Gaien/4728/oosakanoyado.txt

「おもいなしか」は、名詞「思い」と「なす(做す)」の連体形「なし」から作られた語である。「-なし」は「-のように/な」という意味を表す。「そう思うせいかな」「気の

せいか」と表すために用いられる。「そう思うせいか」「気のせいか」は、「そのことは自分自身で思った。自分自身でそうなるかと判断した」と解釈することができるので、「おもいなしか」は証拠的モダリティ「主観」を表すと解釈することができる。「(動詞の連体形+) ~そうだ」と呼応することがあり、認知動詞「思う」と共に使われる例も存在する。

おりあしく (折悪しく) [主観評価]

(38) おりあしく、悪いことは重なるもので、パートとのことがばれたらしい。

suimin.hmc6.net/2004.1.diary.html

(39) そのときはおりあしく、わたしひとりであった。

www.geocities.co.jp/Hollywood-Kouen/2662/bn011.html

「おりあしく(折悪しく)」は、「時期(折)が悪い」という意味を表す。「都合が悪い」を表す点では「あいにく」に似ているが、「おりあしく」は「都合が悪い」という意味だけを表すのである。「あいにく」は、語源から見ると、「にくむ(憎む)」すなわち「残念」という意味も含んでおり、話し手の気持ちを暗示するために用いられるものである。つまり、「あいにく」と「おりあしく」の相違点は語彙的な意味だけである。

おりよく (折良く) [主観評価]

(40) 市街地でも街路樹にクスノキが植えられておりよく見られます。

homepage3.nifty.com/papilio/ageha_shasin.html

(41)... OAナガシマでコンパクトフラッシュ256M (折良く、安売りしていた) とデジカメのバッテリーを購入。

「折良く」は「時期（折）が良い」という意味を含んでおり、話し手の主観態度を表す副詞である。

主観評価を表す副詞は、「主観性」を強調するために、読点で副詞と主節の切れ目を示すことが多い。

かならず（必ず） [認知的モダリティ 確実] [共起制限 「- con」の事象タイプ]

(42) 「かならずできる！10回完成 TOEIC テストイディオム基本編」

books.bitway.ne.jp/shop/mt-detail_B/ trid-main/ccid-1501/cont_id-B1030004001.html

(43) ... 練習を続ければ、必ず早くなる。

www.geocities.jp/yuyusengen/like/typing/typing2003.html

「かならず」は、「仮（かり）ならず」からできたものだと言われる。そして、「かならず」は「仮（かり）でない」「本当のもの」、転じて「間違いのない」「確かに」「確実」という意味を表すということが出来る。「かならず」は、状態を表す「できる」と過程を表す「早くなる」、つまり「-dyn」の事象タイプを表す述語と一緒に現れると、認知的モダリティ「確実」と表すと解釈されるのである。よって、(42)と(43)における「かならずできる」「必ず早くなる」は「確かにできる」「確かに早くなる」と解釈することができる。

[義務的モダリティ 強制] [共起制限 「+con」の事象タイプ]

(44) ご注文の際には、下記の内容をかならずお読みください。

(45) 必要 : 下着などはかならず毎日洗濯をすること。

bbf.cool.ne.jp/byouki_kejirami.htm

(46) ... 検査の前には、かならずいつも検査のやりかたを説明していますが、

www.school.iked.osaka.jp/isibasi-es/hoken/aruhi/aruhi.htm

(47) ... 純朴な田舎の恋人に「かならず帰るから・・・」と言い残して...

www15.plala.or.jp/beneko/gozonzi/gozonzi.htm

「かならず」は、「動作」すなわち「+con」の事象タイプを表す述語と一緒に現れると、義務的モダリティ「強制」を表すと解釈される傾向が強い。(44)と(45)では、発話内効力が「命令的」なので、「かならず」が「強制」を表すと解釈される傾向が非常に強い。

(46)では、「強制」を表す「かならず」は、頻度を表す「いつも」よりも、文の述語から離れて置かれる。言い換えれば、「義務的モダリティ」が「頻度」を支配するのである。その支配関係は、アイコン的な順序「義務的モダリティ>頻度」で反映される。

(47)では、「かならず帰るから・・・」は「約束」するように用いられたものだと解釈される。「かならず」で表す「強制」という義務的モダリティは、聞き手を拘束するだけでなく話し手自身を拘束する場合にも用いることができるといえる。

ただし、「かならず」は、事象の回数を示す「習慣アスペクト (habitual aspect)」を表す場合も用いることもできる。例えば、

(48) 近くに寄ると必ずケンカして吠えています。

blogs.dion.ne.jp/akarin/archives/917362.html

(49) 毎日かならず子供を怒っていました。

www.inter-edu.com/forum/read.php?1113,96954,98354

(48)では、「必ず」が「いつもある」という意味を表す条件節「近くに寄ると」の後ろに置かれるため、モダリティを表すと解釈することができず、「常に」と表すと解釈せざるを得ない。そして、(48)は「近くに寄ると常にケンカして吠えている」と解釈される。このように「かならず」を習慣アスペクト副詞に転用することは、修飾成分の順序パターンから見ると分かりやすい。「モダリティを表す成分が必ず頻度を表す成分より文の述語から離れて置かれる」ことに留意するだけでよいためである。(49)では、「かならず」が「毎日」の後ろに置かれる、つまり、「かならず」が「毎日」より文の述語の近くに置かれるので、「かならず」モダリティを表すと解釈することができず、「習慣アスペクト」を表すと解釈されるのである。

かならずしも (必ずしも) [認識的モダリティ 不確実] [共起制限 否定形]

(50) 昇進することがかならずしもその人の幸せにつながるとはかぎりません。

plaza.rakuten.co.jp/yellowfox/diary/200503150000

(51) ...しかし、最近の社会経済不況により、かならずしも必要だからと、保護器具が全ての人に支給されるとはいえない。

members.at.infoseek.co.jp/stockholm_sweden/welfare/handikapp/hochoki.sikyu.html

(52) 利用者の多いサーチエンジンが必ずしも最適な広告媒体とは限らない。

news.bizstyle.biz/sem_seo/2005/02/post_68.html

(53) 古人は必ずしもみな、素晴らしい詩歌を作っていたわけではない。

keio-mitakai.sfc.keio.ac.jp/public/fukuzawa/detail.php?mitakai_id=&fukuzawa_id=30

(54) 1位は必ずしも最善ではない!?

jeff.ecjapan.jp/archives/000314.html

「かならずしも」は、「一部分はそうであっても、全部がそうではないということ」を表す。言い換えれば、「かならずしも」は、ものごとがそうならない場合を認めることを表すために用いられる副詞なのである。「一部分はそうであっても、全部がそうではないということ」は、「確かにそうなる」すなわち「確実」とは反対の意味なので、「かならずしも」は「不確実」という認識的モダリティを表すといえる。ただし、「反対意味」、すなわち「否定」の意味を表す際には、必ず文法的な方法「述語の否定形」で表さなくてはならない。上記の例文をよく検討すれば、「～わけではない」「～とは限らない」「～とはいえない」、つまり「全部がそうではないということ」を表す構造と呼応するように、「かならずしも」を用いることが顕著である。(54)では、「かならずしも」を消すと、「1位は最善ではない」が「1位が最善であることがそうならない」ことを表すただの否定文になってしまう。しかし、「かならずしも」を付加すると、「1位が最善であることがいつもそうになるわけではない、そうならない場合もある」と表すように用いられると解釈される。

かならずや (必ずや) [認識的モダリティ 確実]

(55) このソフトに含まれている利用者の声はかならずや製作者を力づけることだろう。

www.aao.ne.jp/ac/recommend/ishikawa.html

(56) …かならずや抱腹絶倒の嵐となるはず。

www.shiki.gr.jp/applause/wakatte/

(57) 科学的態度・精神を学ぶことは、我々を取り巻く現代人間社会の問題解決にかならずや役立つことでしょう。

www.u-air.ac.jp/hp/depart/depart08.html

(58) そのうえでアメリカという強大な同盟国と協力して戦えば、この“日朝戦争”は、かならずや勝利できるのである。

www.sukuukai.jp/shiryo/paper06/05.html

(59) かならずや得るものがあると思います。

www.kachijiten.com/realintention/realbbs002/

(60) 6月の都議会選挙はおろか、7月に控えた参議院選挙はかならずや敗れる。

www.nasu-net.or.jp/~yoshimi/mas/ishihara.html

(61) 独裁は必ずや滅びる

yaplog.jp/mcolumn/archive/412

(62) どんなライフスタイルにも対応できるので、1足買えば必ずや2足目が欲しくなってしまうに違いありません。

www.curio-city.com/nv/shop/14674_1.html - 2005年6月12日

「かならずや」は、「かならず」に助詞「や」を付加させて作られたものである。上記の例文から見れば、「かならず」は話し手の確信「確かにそうになる」という意味を表すべく用いられ、「～ことだろう」「～と思う」「～にちがいない」「～はずだ」など、話し手の推量・予想を表す文型と呼応して用いられることも多い。

きっと (屹度・急度) [認識的モダリティ 确实]

(63) このような考えのもと、出光グループの合言葉「ほっと安心、もっと活力、きっと満足。出光の約束」は誕生しました。

www.idemitsu.co.jp/brand/

(64) きっと得する情報箱「インフォーネット」.

tokyo.cool.ne.jp/linklinklink/cclink001/index4.html

(65) わたしが知らないスゴ本は、きっとあなたが読んでいる.

dain.cocolog-nifty.com/myblog/

「きっと」は、「確かにそうなる」と表すために用いられるが、「きっと」で表す「確かにそうなる」という意味は、事実の根拠よりも、話し手の予測・要望に由来する。(63)と(64)では、文の通信状況が「広告」で、聞き手に望ませるように言われるものなので、「きっと」は「聞き手に約束を与える」という意味を暗示すると解釈する傾向が強い。「きっと」で表す「確かにそうなる」は、話し手の予測・要望に由来するものなので、表すモダリティの主観性が高く、話し手の「要望」を暗示するものである。

さいわい (幸い) [主観評価]

(66) 幸い今日の頭痛は軽かったので楽に過ごす事ができた。

www.ann.hi-ho.ne.jp/satomin/3m.htm

(67) 幸い、喋っているうちにすぐに着地することができたが、今の浮上はけっこう高かった。

www.raitonoveru.jp/novel/okigaru/10a.html

「さいわい」は、「運よく」「幸運に」という意味を表す。(67)では、「幸い」が、逆の、関係のある二つの事象に対する主観評価を表すべく、文頭に置かれ読点で副詞と主観評価の対象の節の切れ目を示す。

さぞ・さぞかし・さぞや (嘸・嘸かし・嘸や) [認識的モダリティ 確実]

(68) 八丈島はさぞ、この頃になると暑いでしょう ...

bbs1.parks.jp/10/oja/bbs.cgi?Action=kiji&Base=688&Fx=0

(69) さぞ昨日はお疲れでしたでしょう。

www.fc.olympia.co.jp/hp/parlor/pobbs/pobbs.cgi?action=res&Write_Time=1062177494

(70) これだけアフェリエイトをつければさぞかし儲かるものだろうと思っていたら、なんとホリエモン自身が自分のブログでの売り上げをばらしてしまった。

daytrade.livedoor.biz/archives/10895763.html

(71) 粗末な家に一人で住んでいられるあなたの庵は、さぞかしひっそりして寂しい今日だと思いますので、酒を持って尋ねて来ました。

www.geocities.jp/umezu34/Kouza/kouza311.html

(72) 一般的に「留学して海外に住んでいる」、と聞くとさぞや毎日エキサイティングな日々を過ごしているかのように聞こえますよね。

www.studyabroad-icc.jp/c-naoko/003.shtml - 2005年6月19日

(73) クラブ系の音楽やファッションの根強い流行を考えると、さぞや毎日、にぎわっているに違いない。

www.nishinippon.co.jp/banaten/deep_tenjin2004/back/31209.html

「さぞ（嚙）」は、「然（さ）」に助詞「ぞ」をつけて一つの語に化したものである。「然（さ）」とは「そのように」のことである。ただし、「さぞ」は「（直接見聞していないことについて）こうに違いない」という意味を表すべく用いられる。「さぞ」で表す「確かにそうなる」の確信は、直接見聞きしたことに基づくというよりは、話し手自身の推量に由来するものなので、「さぞ」で表されるモダリティは主観性が高いのである。「さぞ」（「さぞかし」「さぞや」を含めて）は、「～にちがいない」「～と思う」「～だろう」など、話し手の推量・想像を表す文型と呼応する場合が多い。「さぞかし・さぞや」の方は、それぞれ「さぞ」の意味を強化するように助詞「かし」「や」をつけたものである。

さては（扱は）[認識的モダリティ 確実]

(74) 犯人候補がどんどん死んでいってしまうから、さては犯人が死んだふりを…なんて思っていました、全然違った。

yokohama.cool.ne.jp/arihara/sonota.html

(75) 「日記が更新されていないわ。さては毎日遊び歩いているのね？」なんて、勘違いなさらないでくださいませ。

www.g-com.ne.jp/~cake/diary/2000/0005.html

(76) さては日曜日にリアル見に行くんだな？

kanto.machi.to/bbs/read.pl?BBS=tama&KEY=1090845421

「さては」は、「まちがなく」という命題の真偽に対する主観態度を表す副詞として用いられる。また主張を表す構造「～のだ」と呼応する場合が多い。話し手の「真相の推理」、すなわち命題の真偽に対する主観態度を表すものなので、「さては」で表されるモダリテ

ィは主観性が高いのである。

しょせん (所詮) [主観評価]

(77) しかし、しょせん今日始めたばかりの青二才は、三ヶ月やってる私の敵ではないの
でした。

blog.goo.ne.jp/toronikki/c/0a7580e1e38276113342437749655504

(78) ... しょせんバイクでは車には勝てない

hobby7.2ch.net/test/read.cgi/car/1118144161/

(79) しょせん、通信教育は独学と同じ 学校は授業料が高いから、通信教育にしようかな
あ、という人もいるだろうね。

www.koumuinshiken.com/tusin.htm

(80) ブログとかネットとか言うものは、しょせん人間社会のルールに基づいてみんなが
行動するものなのです。

suisantaikoku.cocolog-nifty.com/genyounissi/2005/03/post_6.html

(81) しょせんメモリ 128MB じゃ何もできないらしい。

www.urban.ne.jp/home/mint/hardware/sgi320/first.html

(82) グローバル企業にとっての日本戦略なんて、しょせんそんなものなのではないか。

www.hoken-erabi.net/seihoshohin/goods/9183.htm

(83) しょせん必ず IDE ケーブルと HDD をぶら下げて使う定めなんだけどね。

joker.txt-nifty.com/invisible/remind/index.html

「しょせん(所詮)」は、「あれこれ考えて結論する」という意味を含んでいる。命題に対して、「好ましくない」という主観態度を表すべく用いられるものである。「しょせん」で表す情報は、「この命題が話し手自身の結論に由来するものである」と、「話し手は「このようになることが好きではない・感じがよくない」と思う」という二者である。「～のだ」「～らしい」「～だろう」など、話し手の主張・推量を表す文型と呼応するが多い。

しんじつ (真実) [認識的モダリティ 確実]

(84) 何より、真実彼は神ではあったのだ。

star-p.hp.infoseek.co.jp/novel/1-2.html

(85) それは皮肉な願いではあったが、真実彼はそう思ったのだ。

www5a.biglobe.ne.jp/~ruridou/FF51.htm

副詞の「真実」は、「ほんとうに、たしかに」という、命題の真偽に対する主観態度を表すために用いられるものである。話し手の主張を表す「～のだ」と呼応するが多い。

せっかく (折角) [主観評価]

(86) せっかく昨日車洗ったのにい!

cupcake.exblog.jp/ - 2005年6月24日

(87) せっかく昨日で中間試験が終わったばかりやのに、休み暇もなく Becker と Alvarez の宿題が出ていた。

www.yatsuke.gr.jp/~korie/quoi2002g.htm

(88) 折角、見に行ったのに…。

plaza.rakuten.co.jp/risianthus/diary/200506050000/

(89) 折角、東京までのお土産を買う為にデパートに来たのですから、東京では手に入らないであろう品物を求め、地元の名店の何軒かのショッピング …

www.kodasho.co.jp/kaicho/previ-18.htm

(90) 折角長文で回答して上げた人の内容まで消しちゃうんですね。

www.atmarkit.co.jp/bbs/phpBB/viewtopic.php?forum=10&topic=20904

評価の副詞の「せっかく」は、「努力・期待が空しくなって残念（惜しむ）に思う」という意味を表すべく用いられるものである。意外・不服の気持ちを表す「のに」という接続助詞と呼応する場合が多い。

ぜひとも （是非とも） [主観評価 願望]

(91) ぜひとも観なければ！

ginfizz.jugem.jp/?eid=289

(92) ぜひとも読んでみて欲しい！

www.amazon.co.jp/exec/obidos/tg/listmania/list-browse/-/2TITVSQ1XJSTY

(93) 是非とも雨に勝って下さい！

kanemoto-aniki.ameblo.jp/entry-469f31c720a4f2c9ec29c7233de9181f.html

(94) 是非とも欲しいアイテムかな

carlife.carview.co.jp/User.asp?UserDiaryID=238341

(95) このページへのトラックバック一覧 是非とも見てみたい、

catalog.typepad.jp/catalog/2005/03/post_29.html

「是非とも」は、「あらゆる困難・障害を排除して行う」という意味を含んでいる。話し手の強い要望「動作をする/させることがほしい」という主観評価を表すために、用いられるのである。話し手の意志・希望を表す「～たい形」「～てほしい」「欲しい」や、命令的な発話内効力を表現する「～てください」と呼応することが多い。

たぶん (多分) [認識的モダリティ 可能]

(96) 「やりたいケド、たぶんやらないバイト」 ... バイトっていうか、たぶん詐欺だよ。

plaza.rakuten.co.jp/tvsyutuen/2010

(97) たぶん、甘いはず。

phd-mkluica.ameblo.jp/category-7f8385bc4a411c82e28fe1856d7b66e2.html

(98) 多分、美味いと思う

oniwaban.seesaa.net/article/4399700.html

(99) 多分真相はそんなところなのだろうと思います。

www.han.org/oldboard/hanboard5/msg/1574.html

(100) 多分、もっと面白い場面に遭遇しているヒトがいるんでしょうね・・・。

obugyo0527.exblog.jp/1702708/

「たぶん」は、「可能性が高い」という推量を表すために用いられる。「たぶん」で表す可能性の推量は、話し手自身の主観に基づくものであり、「～と思う」「～はずだ」「～だろう」など、主観に基づく推量を示す文型と呼応することが多い。

どうしても (如何しても) [義務的モダリティ 強制]

(101) どうしても今日帰らねばならないのですか。

www.ne.jp/asahi/ten/room/kangae-1/kanga041.html

(102) しかし、どうしても今日・明日から収入を得たい！ と思っている真剣な方を対象といたします。

fukubz.com/3man/

(103) 家族を迎えるために、どうしても今日までマイヨ・ジョーヌを守りたかったんだ。

www.jsports.co.jp/style/04Tour/report/08.html

(104) そう、私はどうしても今日の内にカシュガルへ行きたかった。

yui-wsh.kir.jp/diary/6.html

(105) 有効期限は半年なので、どうしても今日くらいに行って作っておかないとまずい状態だったんです。

shichan3.cheap.jp/diary2/diary0405.html

(106) 治療中は毎日続けて受診しないと傷害保険が減額されてしまうので、どうしても今日行かないとダメ。

blogs.dion.ne.jp/aquarius_scarlet_lady/archives/120306.html

「どうしても」は、「どんな手段を用いても」「どんなことがあっても」という意味を含んでいるものである。「強い意志に基づく」必要性・強制性、つまり義務的モダリティ「強制」を表すために用いられる。意志を示す「～たい形」や、接助詞「と」で示す条件節（この場合は、「そうしないと悪い結果が起こる」と表すので、打消しの述語と伴って使う傾向がある）と呼応することが多い。

外見から見ると、「是非とも」と「どうしても」は意味が似ているが、「どうしても」、特に(105)における「どうしても」は「そうしないと悪い結果が起こる」という意味を表すため、「しなければならない」、つまり義務的モダリティ「強制」を表すと解釈されるのである。一方、「是非とも」の方は、話し手自身の強い要望（主観態度）を表すものである。

とうぜん （当然）[主観評価]

(107) とうぜん必ず注目されるページになります

www.easy.ne.jp/mag/magazine/mag-moukekata/1996/054.html

(108) 健全な経済状況でも、とうぜん必ず存在する。

www5a.biglobe.ne.jp/~senryaku/home5/new_page_2.htm

(109) そこで、小林さんは出版の戦後の流れのようなことを、話してくださったのですが、とうぜん、今日の問題も同時に話されたのでした。

www.river-moon-j.net/kako/200307/20030702.html

副詞の「とうぜん」は、「あたりまえ」「疑問の余地がない」という主観態度を表すべく使用されることが可能である。(108)では、認識的モダリティ「確実」を表す「必ず」の前に置かれることは、「主観評価」が「認識的モダリティ」を支配することを反映したものである。

どうでも (如何でも) [義務的モダリティ 強制]

(110) 今日だけ・・・なので、どうでも今日運ぶしかない。

diary.fc2.com/cgi-sys/ed.cgi/nantonanto/?Y=2003&M=11

(111) 実は雑誌記者が夕方私の所にやって来て どうでも明日までに原稿を書いて貰
(もら) わねば困ると云うのである。

www.aozora.gr.jp/cards/001030/files/4817_14382.html

「どうでも」は、「どうしても」と同じように、「強制」を表すために用いられる。「必要性」を表す文型「(動詞の現在形)～しかない」「～なければ困る」と呼応することが多い。従って必要性の高い「強制」を表すものである。

どうも [証拠的モダリティ 推測]

(112) どうも 9時にスタート地点に集合し再度登っている様子。

blog.goo.ne.jp/frogmiporin

(113) しかもタイムスタンプを見ると、どうも今日に作られたものようだ。

www.smalltown.ne.jp/~usata/diary/Feb2001-1.shtml - 2005年9月13日

(114) 天気予報によると、明日はどうも雨らしい。

home.alc.co.jp/db/owa/jpn_npa?stage=2&sn=199

「どうも」は、不確かなことを推量することを表すものである。つまり「原因・理由がはっきりしない」ことを暗示する。「どうも」で表した推量は、客観的な根拠によらないので、命題に対する正確さの信頼がやや低い。推量の内容としては「不確か」であること

が多い。(113)では、「～ようだ」話し手の主観的な推量を表す助動詞と呼応して、「この推量が話し手自身の推量だ」と示す。(114)では、推量の情報源が「伝聞」なので、話し手の推量を表す「～らしい」と呼応して「推量の正確さに対する信頼がやや低い」と表すと解釈することができる。

どうやら [証拠的モダリティ 推測]

(115) どうやら明日から世の中3連休らしい・・・。

www.dd.iij4u.or.jp/~kaorun/dialy0002.html

(116) どうやら明日は東京では開花宣言が出されそうですね。目安ですが、毎年東京の開花から約1週間から10日で、富士五湖地方の桜の開花宣言が出されることが多いです。

www.navi-city.com/sakura/index2.html

「どうやら」は、「ようすからすると」「はっきりしないが」という意味を含んでいる。「どうも」に似ているが、「どうやら」の方が客観的な根本による推量を暗示する。また、命題の獲得方法「話し手の推量」と、命題の真偽に対する主観態度「かなり確かだ」の両方ともを暗示するものである。しかしながら、「証拠性」が「認識的モダリティ」を支配するものであるため、「どうやら」も「どうも」も証拠的モダリティ「推測」を表すものだと判断される。「～らしい」「～そうだ」など、話し手の推量を表す助動詞と呼応することが多い。

ねがわくば (願わくば) [主観評価 願望]

(117) ねがわくば、幸せになって欲しいものです。

www.fujitv.co.jp/b_hp/kikenna/index2.html

- (118) ねがわくばわたくしのフェティッシュが、“あうん”って感じてればその機械は大合格。

homepage3.nifty.com/manga/manga/0105nikk.htm

- (119) ねがわくば普通の方がいいです。

blog.goo.ne.jp/japonlove/m/200503

- (120) ねがわくば夏休み中なら良かったのですが。

harachima.exblog.jp/i4

「ねがわくば（願わくば）」は、話し手の「理想」に対する「願望」を表すために用いられるものである。「ねがわくば」で表す「願望」は、「実現の可能性」の判断と関係しないものである。「遠回しに述べる気持ち」を表す「～なのですが」と呼応する場合もある。

まさか [主観評価]

- (121) まさか今日来るとは思っていなかったの、すっかり指し値放置していたのをわすれていました。

momi.blog4.fc2.com/

- (122) まさか今日、いつも通りの日常が終わるなんて知らなかった私がそこには居た。

naryu.fc2web.com/SS/09.htm

「まさか」は、「この物事が予想しないことだ」という主観態度（特に驚きの気持ち）を表す。

まさしく (正しく) [認識的モダリティ 确实]

(123) それは正しく今日のターゲットとなる酒だ！

www.jomon.ne.jp/~mrn/turi.htm

(124) ブラボー」の声も、正しく今日の演奏には相応しいと感じた。

blog.goo.ne.jp/harmoncourt/m/200503

(125) 正しく、昨日私が読んだばかりの作品がそうでした。

principle.jp/bbs2/cf.cgi?id=tomato&mode=all&number=936&rev=0

(126) 私も 28 日正しく昨日行ってきました！！

fiw.web.infoseek.co.jp/wonderlove/live/20032004.htm

副詞の「まさしく」は、ある客観的な根拠によって「確かに、間違いない」と判断することを示すものである。そして、「まさしく」で表す認識的モダリティ「确实」は、「この判断が客観的に正しい」という意味も含んでいるのである。

むろん (無論) 「主観評価」

(127) 現在のような食糧不足な時に、体操をやれなんてとんでもない話だ、と言う人がむろん必ずあるだろう。

www.sutv.zaq.ne.jp/ckapj600/benkyo2/BEN71.htm

(128) むろん、必ず使える、という話ではありません ...

kaburaya.pobox.ne.jp/bbs/storage/satopi_2.htm

(129) 無論、今日組んだ車掌さんには、恥ずかしいから、夢の話は内緒だった。

members.jcom.home.ne.jp/tana-masa/hitokoto.htm 2005年7月8日

(130) 無論今日においても切羽つまってゆく、…

www.geocities.co.jp/Milkyway-Gemini/3933/all.htm

「むろん」は、「明らかで、言うまでもない」、つまり「この物事が当然で、論ずることなくともよく分かる」という主観態度を表すために用いられるものである。(127)と(128)では、「むろん」が認識的モダリティの「必ず」の前に置かれる。このような成分順序は、「主観評価」が「認識的モダリティ」を支配することを反映するものだといえる。また、「明らかで、言うまでもない」は「この物事がそうなることは確かだ」という意味も暗示する。

もちろん (勿論) 「主観評価」

(131) もちろん必ず出れるという確約はありませんが、今の自分に出来る最大限の努力をしてこの1週間を過ごしたいと思います。

blog.nikkansports.com/user/challenge/archives/2005/05/post_85.html

(132) もちろん今日の試合は決勝戦に役立つと思います。

sportsnavi.yahoo.co.jp/soccer/japan/kaiken/2000/ZZZ53H6XSEC.html

(133) 勿論、おそらくご想像通りにサッカー見ました。

page.cafe.ocn.ne.jp/profile/guti/diary/200311

「もちろん」は、「むろん」と同様に、「明らかで、言うまでもない」という主観態度を表す。ただし、「もちろん」の方が話し手の主観的な推量を表す「~だろう」や「~と思

う」と呼応する例も存在する。

もとより 「主観評価」

(134) もとより人間は、すべてさまざまな人やものとの関係性によって生きている。

blogs.dion.ne.jp/a532046809/archives/1229789.html

(135) もとより、快進撃企業にはこうしたタイプの「人財」が、もともと豊富にいたわけでは決してない。

www.hidecnet.ne.jp/~h-hojin/kaisin_4.htm

「もとより」は、「初めから」「以前から」「いうまでもなく」という意味を表す。物事の根本による意見、「明らかで、言うまでもない」を表すために用いられるものである。日常会話より公式の発言に用いられることが多い。

われながら (我作ら) [証拠的モダリティ 主観]

(136) それは、われながら今日の写真の中では一番キリリとした写真だった。

plaza.rakuten.co.jp/cool/

(137) われながら、オーソドックスなセレクトですね。

collabo.s29.xrea.com/blog/archives/000243.html

「われながら」は、「そうなるという判断は話し手自身の評価に由来する」という情報を表すために用いられるものである。物事の状態・程度を表す述語、特に非動詞の述語と一緒に現れることが多い。

第4章 結論

4.0 はじめに

本章では、第3章における実践研究の結果をまとめて、モダリティ・主観評価を表す日本語副詞の特徴・使い方および外国人学習者に対するその日本語副詞の教育について議論することにする。4.1は、本研究の結果のまとめになる。4.2では、研究結果によってモダリティ・主観評価を表す日本語副詞について議論することにする。4.3は、外国人学習者に対する教育の観点から、モダリティ・主観評価を表す日本語副詞について論じる。

4.1 研究結果のまとめ

第3章における実践研究の結果を以下のように整理する。対象とした日本語副詞は全部で32語である。

あ行 あいにく
あたら
いきおい
えてして
おそらく
おもいなしか
おりあしく
おりよく

か行 かならず
かならずしも

かならずや

きっと

さ行 さいわい

さぞ・さぞかし・さぞや

さては

しんじつ

しょせん

せっかく

せひとも

た行 たぶん

とうぜん

どうしても

どうでも

どうも

どうやら

な行 ねがわくば

ま行 まさか

まさしく

むろん

もちろん

もとより

わ行 われながら

「かならず」は、「認識的モダリティ」または「義務的モダリティ」を表すように用いら

れることができるので、「認知的モダリティ」と「義務的モダリティ」両方のグループに属する。

「さぞ・さぞかし・さぞや」は、本稿では一つの語（見出し）とする。

上記の副詞は、その副詞で表す意味機能（モダリティ・主観評価の分類）によって次のように4グループに分けられた。

証拠的モダリティを表す日本語副詞

「推測」

どうも

どうやら

「主観」

おもいなしか（思いなしか）

われながら（我乍ら）

認知的モダリティを表す日本語副詞

「確実」

いきおい 共起制限：「+dyn」の事象タイプ

かならず（必ず） 共起制限：「-con」の事象タイプ

かならずや（必ずや）

きっと（屹度・急度）

さぞ・さぞかし・さぞや（嘸・嘸かし・嘸や）

さては（扱は）

しんじつ（真実）

まさしく（正しく）

「不確実」

かならずしも (必ずしも) 共起制限: 述語の否定形

「可能」

おそらく (恐らく)

たぶん (多分)

「見込み」

えてして (得てして)

義務的モダリティを表す日本語副詞

「強制」

かならず (必ず) 共起制限 「+con」の事象タイプ

どうしても (如何しても)

どうでも (如何でも)

主観評価を表す日本語副詞

あいにく (生憎)

あたら (可惜)

おりあしく (折悪しく)

おりよく (折りよく)

さいわい (幸い)

しょせん (所詮)

せつかく (折角)

ぜひとも (是非とも) [願望]

とうぜん (当然)
ねがわくば (願わくば) [願望]
まさか
むろん (無論)
もちろん (勿論)
もとより

「副詞」と「連語」の区別については、日本語副詞の中には「折悪しく」「折りよく」二つの単語の組合せから発展したものが、「副詞」か「連語」かのどちらかを判定することが難しい。本稿では、研究範囲内のモダリティ・主観評価の意味を基準として「この語は研究範囲内のモダリティ・主観評価の意味を表すものかどうか」ということをテストし、対象の語が「副詞」か「連語」かのどちらかを決定する。それゆえ、本稿では話し手の主観態度を表すように用いられる「折悪しく」「折りよく」が主観評価を表す「副詞」と判定した。

4.2 モダリティ・主観評価を表す日本語副詞についての議論

4.2.1 諸言語におけるモダリティの表し方について

一般的に、諸言語におけるモダリティの表し方が3つに分けられる。英語における認識モダリティ「可能」の表し方の例を以下に示す。

1) 述語で表す。

例 It is possible that he is reading books.

2) 文法的方法（構造や法動詞など）で表す。

例 He may be reading books.

3) 語彙的方法（副詞など）で表す。

例 He is possibly reading books.

上記のように、英語では認識モダリティ「可能」は「形容詞の述語」又は「法動詞」「副詞」のどちらでも表すことができる。しかしながら、この二つでは、モダリティの表し方が少し異なっており、意味の相違が暗示される。例えば、形容詞の述語でモダリティを表すのは、「このモダリティが文の内容の核心だ」ということを暗示している。構造や法動詞など「文法的方法」でモダリティを表すのは、「このモダリティが文法体系の一部であり基本情報だ」と暗示する。副詞など「語彙的方法」でモダリティを表すのは、「このモダリティが追加情報になる」と暗示する。違いモダリティの表し方は、その方法で表したモダリティ情報の重要度を示すことができる。

なお、認識モダリティ「可能」がこの3つの方法で表されるが、全てのモダリティが「可能」と同じように3つの方法のどちらでも表されるわけではない。例えば、「許可」「禁止」という義務的モダリティは、述語で表すことがただ一つの方法である。

(1) Smoking is allowed. （「許可」のモダリティ）

(2) Smoking is prohibited. （「禁止」のモダリティ）

それゆえ、「許可」「禁止」という義務的モダリティは、文法の体系の一部とすることができない。FGでは、言語表現の分析対象とされる「モダリティ」が文法的方法または語彙的方法で表したものに限られる。述語で表すモダリティの方は、その述語の語彙的意味にかかわることである。

なお、FGでは「モダリティ」と「発話内効力」が全然違うものである。「モダリティ」特に本研究の対象「証拠的モダリティ」「認識的モダリティ」「義務的モダリティ」は命題・事象に対する話し手の「考え・態度」を表すものであるが、「発話内効力」の方は言語表

現で何かをするように使われたものである。以下の例を考察したい。

(3) No smoking (「禁止」の発話内効力)

文型から見ると、(3)が顕著に「禁止」の発話内効力をもっている。言い換えれば、(3)は喫煙を禁ずるようにつけられた表現である。(2)では、「prohibited」という述語が「(ここで)喫煙することがさせることができないことだ」という態度を表すものである。ただし、(2)の文型が断定文型なので、(2)の発話内効力が「平叙」とか「禁止」とかどちらでも解釈されることができる。(2)を聞き手に内容を伝えたり動作を禁じたりするように使うことが話し手の選択によるものである。(2)の場合では、「モダリティ」と「発話内効力」が別のものであるということがはっきりする。

本稿では、「副詞」で表すモダリティを研究対象とすることにする。

4.2.2 日本語副詞で認知的モダリティの表し方

モダリティを表す日本語副詞では、一番多いのが認知的モダリティの表すものである。認知的モダリティを表す日本語副詞の一覧は、次のようにまとめられる。

確実	いきおい
	かならず (必ず)
	かならずや (必ずや)
	きっと (屹度・急度)
	さぞ・さぞかし・さぞや (嗚・嗚かし・嗚や)
	さては (扱は)
	しんじつ (真実)
	まさしく (正しく)

不確実 かならずしも (必ずしも)

可能 おそらく (恐らく)
 たぶん (多分)

見込み えてして (得てして)

認識的モダリティを表すものの中には「確実」「不確実」「可能」「見込み」を表すものがあるが、一番多いのは「確実」なのである。この現象は次のように説明できる。

- 1) 「確実」という認識的モダリティは、「物事がそうなることは確かだ」という情報を表すものである。ただし、さまざまな主観態度・情報源に基づく「確かだ」の判断を表すように、「副詞」を使うことが適切な方法である。「確実」を表す日本語副詞は全てが「確かだ」という判断を表すが、語彙的な意味には相違がある。例えば、「きっと」が「「確かだ」の判断が事実の根拠より話し手の予測・要望から由来するのだ」ということを暗示するのに対して、「さぞ・さぞかし・さぞや」の方が「確かだ」の判断が直接見聞より話し手自身の推量に由来する」と暗示している。
- 2) 「可能」「見込」を表すことについては、通常は、諸言語には述語や法動詞・文型など文法的方法で表す方法がある。ただし、述語や法動詞・文型などで表すのが「文の内容の核心」や「文法体系の一部」つまり「表したモダリティが重要な情報だ」を暗示すると解釈される傾向が強い。「主観性」や「遂行性」つまり話し手の「主観態度」を強調するように、認識的モダリティ副詞を使った方が適切である。Jan Nuyts (1993) によると、形容詞「probable」と副詞「probably」の使い分け方が違い「主観性」や「遂行性」を表すように使われたストラテジーだということがはっきりする。

4.2.3 日本語副詞で義務的モダリティの表し方

義務的モダリティを表す日本語副詞の一覧は、次のようにまとめられる、

強制 かならず (必ず) 共起制限 「+con」の事象タイプ
 どうしても (如何しても)
 どうでも (如何でも)

日本語では、副詞で表すことができる義務的モダリティが「強制」である。「強制」とは、「しなければならない」のことである。ただし、「しなければならない」と判断することは「これが規則だ」「する必要がある」「しなければ困る」いろいろな理由でそのように判断するのである。その理由を暗示するように、「副詞」を使ったほうが適切な方法である。法動詞・文型で「強制」を表すことと異なる「強制」を表すことが見つかったのである。例えば、英語では、「must」と「have to」は両方が「強制」を表す文法的な方法であるが、だいたい「must」が「これが規則だ」「しなければ困る」ということを暗示するが、「have to」の方が必要性の高い「強制」を表すように用いられることである。日本語でも、「～しなければならない」と「～しなくてはならない」の文型がほぼ同じ意味もっていて使いかえることができるが、「～しなくてはならない」の方が「規則・慣例に基づく「強制」だ」ということを暗示することがある。例えば、

- (4) パートでも社会保険・労働保険に加入しなくてはならないか。

www.interq.or.jp/asia/lee/qanda/990826.htm

- (5) 労働者を一人でも雇っていれば労働保険に加入しなければならない、ことは事業主の方はご存知のことと思います。

www5b.biglobe.ne.jp/~ida-t/watasino,hitorigoto,kensetu4.htm

(4)と(5)の例を比較すると、(4)における「加入しなくてはならない」が「これが規則なので従わなければならない」という意義を含み、(4)の質問の焦点が「社会保険・労働保険に加入することが従わなければならない規則なのか」というものであるのに対して、(5)では、「加入しなくてはならない」がただ「強制」を表すものである。「～しなくてはならない」で表す「強制」は、「これが規則だ」「する必要がある」「しなければ困る」等の根本を指定していないで、「一般的な強制」ともいえるものである。

義務的モダリティを表す日本語副詞の使い方は、次のようにまとめられる。

- 1) 「必ず」は、命令的な発話内効力を表す文型（命令形・依頼形など）と呼応して、発話内効力を強化させるように使うことができる。

例 かならずお読みください

- 2) 「どうしても」「どうでも」は、「～しなければ困る」「～ないとだめ」「～しかない」など「強制」を表す構造・述語と呼応するように使うことができる。

例 どうしても今日帰らねばならない

どうしても今日行かないとダメ

どうでも今日運ぶしかない

どうでも明日までに原稿を書いてもらわねば困る

- 3) 「どうしても」は、希望・意志を表す「～たい形」の述語と呼応して、希望・意志を強化させるように使うことができる。

例 どうしても今日・明日から収入を得たい

FGでは、「希望・意志」が内在的モダリティとされる。上記から見ると、日本語における

義務的モダリティ副詞が義務的モダリティを表すだけより義務的モダリティによって文型・述語で表す発話内効力や「強制」「希望・意志」を強調するように用いられるものといえる。

4.2.4 日本語副詞で証拠的モダリティ・主観評価の表し方

証拠的モダリティを表す日本語副詞の一覧は、次のようにまとめられる。

推測 どうも
 どうやら

主観 おもいなしか (思いなしか)
 われながら (我乍ら)

上記のように、証拠的モダリティを表す日本語副詞というのは非常に少ない。通常は、主観的な推量を表すように、「(動詞の連体形) ~そうだ」「~ようだ」「~らしい」等の文型を使うだけで充分である。ただし、証拠的モダリティ副詞を推量を表す文型とあわせて使った方がモダリティを表すだけでなく推量の根拠・態度を暗示することである。「どうも」が客観的な根拠によらない推量を暗示するが、「どうやら」の方が客観的な根拠による推量を暗示する。従って、「どうも」で表した推量が「不確かだ」の態度を含んでいる一方、「どうやら」で表した推量が「かなり確かだ」の態度を含んでいる。証拠性は、物事がそうになる正確さに対する信頼を支配することである。

なお、「主観」を強調するように、「おもいなしか」または「われながら」を使うことができるのである。「おもいなしか」は、「そのことは自分自身で思った。自分自身でそうになると判断した」と暗示する。「われながら」は、「この命題が自分自身の状態・程度の評価(判断)なのだ」と暗示する。意義が異なっても、両方の副詞は「この命題話し手自身だけの意見・結論なのだ」を示すように用いられるものなので、証拠的モダリティ「主観」を表すものだと判断された。

「主観評価」は、主文で表した命題に対する話し手の個人的な「よしあし」の判断を表すものである。主観評価を表す日本語副詞の一覧は、次のようにまとめられる。

あいにく (生憎)
あたら (可惜)
おりあしく (折悪しく)
おりよく (折りよく)
さいわい (幸い)
しょせん (所詮)
せっかく (折角)
ぜひとも (是非とも) [願望]
とうぜん (当然)
ねがわくば (願わくば) [願望]
まさか
むろん (無論)
もちろん (勿論)
もとより

主観評価を表す日本語副詞については、英語とは異なり、日本語には英語と同じような派生副詞ではなくより基本副詞で主観評価を表すことができる。これは日本語の特徴の一つといえる。

4.3 外国人学習者に対するモダリティ・主観評価を表す日本語副詞の教育

外国語特に英語に比べて、日本語ではモダリティの表し方が法動詞や文型に限るわけではない。副詞で色々なモダリティを表すことの良い点は、モダリティの情報だけでなく同時

にそのモダリティのでどころ（「必要性」「予測」「規則」）などの情報も示すことができる。従って、モダリティを表す日本語副詞を翻訳して外国人学習者に教えることがほとんど不可能である。

例えば、「かならず」が「certainly」「surely」「by all means」「always」に翻訳されたが、日本語における「かならず」の使い方を理解して正しく使い分けることは単語の意味の訳の対応として理解するということでは不十分である。日本語副詞の使い方を理解することは、その副詞の意味（語源）および共起制限を理解することから始まるのである。それゆえ、外国人学習者に日本語副詞特にモダリティを表す副詞を教える際には、その副詞の使い分け方、つまり共起制限から始めることが外国人にとって分かりやすいアプローチなのである。

参考文献

- S. グリーンボーム (1983) 『英語副詞の用法』 研究社出版
- 国立国語研究所 (1991) 『副詞の意味と用法』 大蔵省印刷局
- 島本基 (1989) 『日本語学習者のための副詞用例辞典』 凡人社
- 茅野直子・秋元美晴・真田一司 (1987) 『副詞』 荒竹出版
- 寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人 (1998) 『ケーススタディ日本文法』 第 16 刷
おうふう
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
- 飛田良文・浅田秀子 (2003) 『現代副詞用法辞典』 第 4 刷 東京堂出版
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1995) 『基礎日本語文法 改訂版』 第 6 刷 くろしお出版
- 森本順子 (1997) 『話し手の主観を表す副詞について』 第 2 刷 くろしお出版
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (2000) 『モダリティ』 岩波書店
- Dik, Simon C. 1997. *The theory of Functional Grammar. Part I: the structure of the clause*. Kees Hengeveld (ed.) 2d rev. ed. Berlin: Mouton de Gruyter.
- . 1997. *The theory of Functional Grammar. Part II: complex and derived structures*. Kees Hengeveld (ed.) 2d rev. ed. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Dik, Simon C.—Kees Hengeveld—Elseline Vester—Co Vet. 1990. The hierarchical structure of the clause and the typology of adverbial satellites. In: Jan Nuyts—A. Machtelt Bolkestein—Co Vet (eds.), *Layers and levels of representation in language theory: a functional view*, 25-70. (Pragmatics and Beyond 13.) Amsterdam: John Benjamins.
- Hengeveld, Kees. 1992. Parts of speech. In: Michael Fortescue, Peter Harder & Lars Kristoffersen eds, *Layered structure and reference in a functional perspective* (Pragmatics & Beyond New Series 23), 29-55. Amsterdam: Benjamins.
- Hengeveld, Kees. 1992. *Non-verbal predication: theory, typology, diachrony* (Functional Grammar Series 15). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hengeveld, Kees. 1997. Adverbs in Functional Grammar. In: Gerd Wotjak (ed.), *Toward a Functional lexicology: Hacia una lexicología funcional*, 121-136. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Kamiya, Taeko. 2002. *The handbook of Japanese adjectives and adverbs*. Tokyo: Kodansha International.

Nuyts, Jan. 1993. Epistemic modal adverbs and adjectives and the layered representation of conceptual linguistic structure. *Linguistics* 31. 933-969

Mackenzie, J. Lachlan. 2001. Adverbs and adpositions: the Cinderella categories of Functional Grammar. *Revista Canaria de Estudios Ingleses*. 42: 119-135.

Olbertz, Hella -Kees Hengeveld-Jesús Sánchez García. 1998. *The structure of the lexicon in Functional Grammar*. (Studies in Language Companion Series 43.) Amsterdam: John Benjamins.